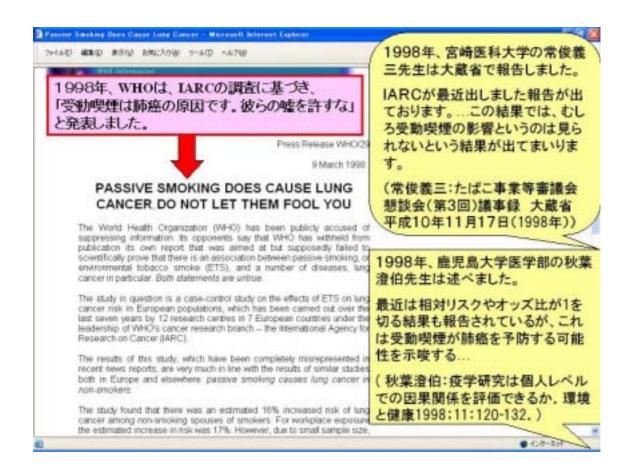
受動喫煙の害を隠すプロジェクト





http://home.att.ne.jp/star/publichealth/ 平成 15 年 2 月 1 4 日 切明 義孝

目次

はじめに	4
平山雄の発見	5
受動喫煙研究の歴史	6
平山雄の研究は時の試練に耐えて持ちこたえている(WHO)	13
タパコ産業から金銭を供与された医師は受動喫煙の害を否定する	14
受動喫煙の害を隠すプロジェクト	16
大きく報道された受動喫煙の害を隠すプロジェクト	17
WHOも非難した受動喫煙の害を隠すプロジェクト	19
THE CENTER FOR INDOOR AIR RESEARCH (CIAR)とは	22
プロジェクトの始まり	23
矢野榮二と香川順からタバコ産業への提案	24
矢野榮二と香川順によるこのプロジェクトの「見積書」	25
CIA R会議でのプレゼンテーションが決まる	26
矢野榮二と香川順の提案について(タバコ産業の文書より)	27
「見積書」に対するタバコ産業の反応	28
プロジェクト価格の交渉	29
プロジェクトの目的は平山雄の信用を失墜させることであり、メンパーは平山雄の報告が正	
知っていた。	
矢野榮二と香川順の提案に対するタバコ産業の反応	
~ 日本たばこ産業への協力依頼 ~	
LEE さんは日本たばこ産業に協力を依頼し、香川順にコンタクトを取ります	34
受動喫煙の害を隠すプロジェクトの黒幕 PROCTOR から春日斉への私信	
矢野榮二と香川順のプロジェクトの目的	39
プロジェクトで作成された論文の要約	40
プロジェクトの黒幕 CHRISTOPHER PROCTOR さんからタバコ産業への手紙	
プロジェクトで作成された論文	50
タパコ産業は LEE さんとの関係を障子うとします	51

蓄積されてきた環境タバコ煙の発癌性の証拠	54
矢野榮二らは、「環境タバコ煙が肺癌の危険を高めるという直接的な証拠はな 文を作成した	
蓄積されていた環境タバコ煙の発癌性の証拠	57
J R 西日本職場分煙要求訴訟で提出された論文	58
受動喫煙は肺癌の原因です。彼らの嘘を許すな!(WHO)	62
IARC は受動喫煙が人間への発癌性を有すると宣言しました	63
HEALTH SCOUT NEWS による報道	66
受動喫煙の害を隠すプロジェクト(WHOの非難)	68
あとがき	70
付録 創造主が禁じたタバコと予言されていた御用学者	71

はじめに

受動喫煙(環境タバコ煙)の発癌性は1981年に平山雄によって発見されました。これはタバコを吸わない女性がタバコを吸う男性と結婚すると、タバコを吸わない男性と結婚した場合に比べて、肺癌の危険が約2倍になるという調査結果に基づく報告でした。

では、今から20年も前に発見された受動喫煙の害が未だに議論を巻き起こしているのはなぜでしょうか?受動喫煙の害を肯定する報告と、受動喫煙の害を否定する報告を織り交ぜて時系列順に記載するとある特徴が見えてきます。

すなわち、受動喫煙の害を肯定した報告は主として信頼しうる公的機関から発表されています。 一方、受動喫煙の害を否定する報告を行った報告者のほとんどが何らかの形でタバコ産業から 金銭を授受しています。

例えば、受動喫煙の害を曖昧にする報告を行っている者として、春日斉(東海大学・公衆衛生)、 常敏義三(宮崎医科大学・公衆衛生)、矢野榮二(帝京大・公衆衛生)、香川順(東京女子医大・公 衆衛生)、原澤道美(東京大学)などを上げることが出来ます。そして、この全員がタバコ産業から 金銭を授受していたことが最近、明らかになってきました。

タバコ産業による金銭供与がタバコの害を隠すことを前提に行われていたという証拠はありませんが、結果として、タバコ産業から金銭供与を受けた医師が受動喫煙の害を否定していることは否めません。

この資料は様々な文書によって構成されていますが、更に知識を深めたい方のために出典は全 て明らかにし、引用は可能な限り原文のままに引用し、英文は可能な限り(スペースが許す限り) 原文を併記しました。そして、事実を事実として読者に判断していただくために、編集者のコメント は最小限にとどめました。

それでは、受動喫煙研究の歴史を紐解いてみましょう。

平山雄の発見

1981年、平山雄は受動喫煙が肺癌の原因になることを発見し、英国の医学誌British Medical Journalに掲載されました。

BRITISH MEDICAL JOURNAL VOLUME 282 17 JANUARY 1981

193

PAPERS AND SHORT REPORTS

Non-smoking wives of heavy smokers have a higher risk of lung cancer: a study from Japan

TAKESHI HIRAYAMA

Abstract

In a study in 29 health centre districts in Japan 34 540 non-smoking wives aged 40 and above were followed up for 14 years (1968-79), and standardised mortality rates for lung cameer were assessed according to the smoking habits of their husbands. Wives of heavy smokers were found to have a higher risk of developing lung cameer and a dose-response relation was observed. The relation between the husband's smoking and the wife's risk of developing lung cameer showed a similar pattern when analyzed by age and occupation of the husband. The risk was particularly great in agricultural families when the husbands were aged 40-59 at carolinent. The husbands' smoking habit did not affect their wives' risk of dying from other disease such as stomach cancer, cervical cancer, and ischaemic heart disease. The risk of developing emphysema and aschma seemed to be higher in non-smoking wives of heavy smokers but the effect was not statistically significant.

The husband's drinking habit seemed to have no effect on any causes of death in their wives, including lung cancer.

These results indicate the possible importance of passive or indirect smoking as one of the causal factors of lung cancer. They also appear to explain the long-standing riddle of why many women develop lung cancer although they themselves are non-smokers. These results also cast doubt on the practice of assessing the relative risk of developing lung cancer in smokers by comparing them with non-smokers.

Introduction

The possible consequences to the health of non-smokers of long-term exposure to cigarette smoke (passive smoking) should

National Cuncer Centre Research Louistute, Tokpo TAKESHI HIBAYAMA, MD, MPR, shirf of epidemiology division be studied thoroughly because the side-stream and secondhand smoke of eigerettes contain various toxic substances, including carcinogens.¹⁸ The need for such a study increased by the report of small-sirvays dysfunction in non-smokers chronically exposed to tobacco smoke.¹⁹

The effect of passive smoking on lung cancer was studied by following 91 540 non-smoking housewires aged 90 and above and measuring their risk of developing lung cancer according to the smoking habits of their husbands.

Method

To study the consequences to health of such factors as eigerette smoking, alsobed drinking, occupation, and merital status, a prospective population study has been in progress in 20 health control districts in tix prefectures in Japan since the autumn of 1965. In total 255 118 adults (122 261 sten and 142 287 woman) aged 40 years and over, 91-99), of the contact population, were interviewed and followed by catablishing a second linkage system between the risk-factor records, a residence list obtained by special yearly census, and death certificates.

Since the effect of direct smoking of cigarettes in this study has already been reported,⁴⁻⁷ my study focused on the effect of hasband's smoking on the risk of lung cancer in their non-smaking wives. Such observation was possible since detailed questions about lifestyle, including smoking habits, were mixed of husbands and wives independently at the start of this study. No subjective bins was therefore oncewholds.

conceivable.

A total of 346 deaths from lung cancer in women were recorded during 14 years of follow-up (1966-79). Of these women 245 were married, and 174 of these were also non-smokers. There cannot occurred among 91 560 non-smoking married women whose hasbands' smaking habits were studied. The risk of lung cancer was carefully measured, taking into consideration possible confounding variables.

Results

When of heavy smakers were found to have a higher sisk of developing lung cancer than wives of non-smokers and a statistically significant dose-response relationship was observed (Manuel-extension χ test result being 3.259; two-tailed p=0.00097). Age-occupation standardised annual meetality rates for lung cancer were 8.7/100.000 (32 out of 21.893) when hashands were non-smokers or occasional amolores,

Bulletin of the World Health Organization, 2000, 78 (7)

受動喫煙研究の歴史

ETS(環境タバコ煙)問題について、専門家のご意見を中心に、時系列順に御紹介します。

1979年 日本専売公社の委託研究「喫煙と健康に関する委託研究の経過と展望」は受動喫煙の影響について次のように報告しました。

受動喫煙の影響は特殊な環境を除けば一般に少ないとみなされているが、特定疾患患者、乳幼児にはその影響が認められるとの報告があり、今後の検討が必要である。

(喫煙と健康に関する委託研究の経過と展望 喫煙と健康に関する研究運営協議会 会長 香月 秀雄 昭和54年 1月17日)

1979年の時点で既に受動喫煙が特定疾患患者と乳幼児に影響を及ぼすことについて報告されています。

1981年 BMJ 誌は、平山 雄(Takeshi Hirayama)らによる疫学研究を掲載しました。

「タバコを吸わない女性が喫煙者と結婚すると、非喫煙者と結婚した場合に比べて肺癌になり易い。」

(Non-smoking wives of heavy smokers have a higher risk of lung cancer:a study from Japan, British Medical Journal, 1981, 282 (6259: p183-185))

受動喫煙が肺癌の原因になることを指摘した最初の報告です。

- 1892年 春日斉は「夫がヘビースモーカーだと(非喫煙)妻は毎日10本、喫煙が野放しの職場で働く(非喫煙)のLの場合は毎日20本、それぞれいや応なしにタバコを吸わされていることになる」と平山研究を支持する発表を行う(1982年10月11日付『日本経済新聞』)。また「喫煙所以外は禁煙にするなど、職場の環境浄化が必要だ」とも警告しました(同日付『産経新聞』)。
- 1986年 米国の公衆衛生局長官 Dr. Everett Koop は報告書を出しました。 「ETS(環境タバコ煙)は非喫煙者の肺癌発生に寄与している。」(1986)
- 1986年 日本たばこ産業が【喫煙科学研究財団】を設立する。

昭和 61 年喫煙科学研究財団研究年報によると、

既に、タバコと肺癌の因果関係は明らかでした。 …注) なんと、国際癌研究機関 (IARC)による認定よりも早かった。

竹本和夫 埼玉医科大学名誉教授によると

> 北川らは… 喫煙者に肺がんが発生する相対危険度は男性で非喫煙者の 4.2 倍、女性で 2.1 倍であった。組織型別にみると、男性の扁平上皮がん 27.8 倍以上、小細胞がん 7.5 倍以上、大細胞がん 5.6 倍以上となるが、腺がんは 1.5 倍、

女性の腺がんは 1.3 倍であり、組織型による差が大きく、喫煙と腺がんとの関係は弱いと想定した。腺がんの組織亜型別に検討する必要性を指摘している 46)。 引用文献 4.6)には昭和 61 年と明記されています。

- 46) 北川知行、土屋永寿、翁 秀岳ほか クロム肺がんの発生に及ぼす喫煙の影響 - 喫煙と肺癌組織型との関係-. "昭和 61 年"度喫煙科学研究財団研究年報: 160-165.
- 1987年 【翌年】、IARC はタバコ煙を明白な発癌性物質【Group1】と認定しました。
- 1988年 英国の政府諮問委員会はETSが非喫煙者の肺癌を10~30%増加させると結論しました。
- 1988年 日本たばこ産業が助成する、昭和 63 年度喫煙科学研究財団研究年報によると、妊婦に対する受動喫煙の害が明らかになりました。
- 1988年 米国タバコ産業により The Center for Indoor Air Research (CIAR)が設置される。
 CIARは資金供与により環境タバコ煙に関する論文作成を支援しました。しかし、CIARが
 支援する論文はタバコ産業の立場で書かれ、分煙を阻止する根拠として利用されました。

(Barnes DE, Bero LA. Industry-funded research and conflict of interest: an analysis of research sponsored by the tobacco industry through the Center for Indoor Air Research. *J Health Polit Policy Law* 1996; 21: 515-542)

1989年 喫煙と健康の問題に関連するたばこ事業のあり方について(たばこ事業等審議会 喫煙と 健康問題総合検討部会 平成元年5月30日 p6)

「受動喫煙に関する臨床医学的研究において、非喫煙者への影響を見たものがあり、たば こ煙による眼、鼻及び、喉に対する刺激並びに咳等の症状が認められている」

受動喫煙が肺癌以外に咳などの症状を引き起こすことが述べられています。

1991年 受動喫煙の害を隠すプロジェクトが発足。これは帝京大学の矢野栄二教授と東京女子 医科大学の香川順教授がCIARに提案したことが契機となった。

見積書によると、彼らがタバコ会社に要求した報酬は24万3千ドルでした。

(Philip Morris. Proposal for an applied research study to investigate exposure to environmental tobacco smoke in non-smoking Japanese women. Covington and Burling. 5 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544477_4481.)

1991年 米国のタバコ産業は日本たばこ産業にこのプロジェクトへの協力を依頼し、プロジェクトの

監督としてBAT社の主任研究員 Proctor 氏が任命される。

(Osdene TS. Investigation of exposure to ETS in nonsmoking Japanese women. Philip Morris. 16 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544449.)

1991年 日本たばこ産業は春日斉(東海大学医学部 名誉教授)を非常勤委嘱者として雇います。

1992年 矢野榮二、香川順は"受動喫煙の疫学研究と交絡因子"に関する論文を作成します。

「この研究では(非喫煙者として)誤分類された喫煙者は比較的少数(毎日喫煙する者19人、時々吸う者5人)であった。しかし、多数の者が誤分類されることもある得るため、受動喫煙により肺癌の危険が増加するという日本の報告は、誤分類のみで説明できるだろう。」 (Yano E, Kagawa J. Confounding factors in epidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese women. Covington and Burling. 21 Apr 1992. RJ Reynolds documents website. Bates No 510627012_7023.)

1992年 春日斉は"受動喫煙の疫学研究と交絡因子"に関する報告をします。

「ETSの研究では、ETS測定法の未開発、ETS被爆者と疾患の誤分類による bias や、それに基づくETSの過大評価、微弱なETSと肺癌の関連の分析方法、信頼が高いといわれてきた Cohort study の欠点、様々な交絡変数等の問題がクローズアップされている。」

(春日斉 環境中たばこ煙による受動喫煙の疫学 大気汚染学会誌 J.japan Soc.Air Pollut.27(4)175~189、1992, JR西日本分煙訴訟乙第8号証)

この書証には、なんと、受動喫煙の害を隠すプロジェクトを指揮していた Proctor 氏からの 私信(1991年)が紹介されており、春日斉がプロジェクトに関与していたことは明らかである。

1993年 矢野榮二、LeePN は"受動喫煙研究の限界"に関する論文を作成します。

「夫の喫煙を受動喫煙曝露の指標とした日本の疫学研究は不適切であることが示された。日本の研究で報告された喫煙と肺癌の関連は、恐ら〈環境タバコ煙によるものではな〈喫煙習慣の誤分類や他の危険因子などの交絡因子によるものであろう。」

(Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. PN Lee Statistics and Computing. 15 Aug 1993. Philip Morris documents website. Bates No 2023053346 3367.) 矢野榮二の協力が明記されている。

1993年 春日斉は"受動喫煙研究の限界"に関する報告をします。

「(喫煙についての) ランダムに発生する"勘違い"報告は不可避であるが2%を超えることは稀であるのに対し、故意の誤報告は20-30%に達するとの Lee や Jarvis の報告があり、bias の発生源として見逃すことはできない」

「Lee らは、ETSと直接関連しないこれらライフスタイルの諸因子が肺癌と交絡する

ところから、誤分類バイアスと併せ、ETS曝露による肺がんリスクの増加を説明できると述べている」

(春日 斉 禁煙論批判 - 主として受動喫煙の立場から - 病態生理 Vol1.12 No.3 (1993:3) J R 西日本分煙訴訟乙第 1 0 号証)

1993年 米国 EPA はタバコ煙を明白な発癌性物質 [ClassA] に認定しました。

1994年 矢野榮二、LeePN は"日本の疫学研究の限界"に関する論文を作成します。

「日本では女性の喫煙が未だ社会的容認を得にくいため、喫煙者が非喫煙との虚偽の報告をする割合が西洋に比べると高い」

「これらの研究で観察された肺癌リスクの上昇は、受動喫煙によるものではなく、喫煙習慣の誤分類や他の危険因子などのバイアスによるものである。」

(Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. Philip Morris. 18 May 1994. Philip Morris documents website. Bates No 2050751646_1666.) 矢野榮二の協力が明記されている。

1994年 春日斉は"日本の疫学研究の限界"に関する報告をします。

「日本では女性の喫煙が未だ社会的容認を得にくいため、喫煙者が非喫煙との虚偽の報告をする割合が 20 - 30%に達することも稀でないことは、我々や Lee らの尿中ニコチン調査でも明らかであり、その誤分類によるバイアスは見逃すことが出来ない」

(春日斉 環境中たばこ煙(ETS)への曝露をめぐって-疫学の視点から- 癌治療・今日と明日 Vol.16,No.3、May 1994 JR西日本分煙訴訟乙第11号証)

1995年 「環境タバコ煙が肺癌の危険を増加させると言う証拠は無い」と結論する論文が LeePN の名前で発表されます。

(Lee PN. "Marriage to a smoker" may not be a valid marker of exposure in studies relating environmental tobacco smoke to risk of lung cancer in Japanese non-smoking women. Int Arch Occup Environ Health 1995; 67: 287-294)

矢野榮二の協力が明記されている。

1995年 春日斉が「環境タバコ煙が肺癌の危険を増加させると言う証拠は無い」と結論する論文を 発表します。

「Lee によれば、…研究の質が劣るほどリスクが大きく、Odds 比下限値は1.16と有意であり、質が優れている論文ほど、Odds 比 1.06、下限値 0.95 と有意でなくなっている。このことは明らかに疫学の研究レベルが上がるにつれ Odds 比は 1.0 に収斂し有意でなくなる傾向にあると言える」

(春日 斉 たばこの害と効用についての認識 Health Sciences Vol.11 No1.1995 JR西日本分煙訴訟乙第12号証)

1995年 平山雄は病死します。

- 1996年 平山雄が病死した次の年も、春日斉 東海大学名誉教授は執拗に平山雄を中傷し続け、受動喫煙の害を否定します。
 - >平山雄の研究は信頼性に乏しい。...受動喫煙と「肺癌」の関係を否定しました。
 - >宮崎医科大学の**常俊義三**らの…受動喫煙と『ぜん息』との関連を明確に"否定"した本グルーフの疫学的研究は、高〈評価される。

(春日 斉 受動喫煙に関する基礎的研究 喫煙科学研究10年の歩み、1996)

- 1996年 厚生省は「公共の場所における分煙のあり方検討会報告書」を発表します。
- 1998年 英国厚生省報告書 The Report of the Scientific Committee on Tobacco and Health (SCOTH) は結論しました。
 - >...受動的喫煙は『肺癌』、『ぜん息』、乳幼児突然死(SIDS)等の原因になる。
- 1998年 WHO は「受動喫煙は肺癌の原因です。**彼らの嘘を許すな!**」と発表しました。
 (Press Release WHO/29 9 March 1998 PASSIVE SMOKING DOES CAUSE LUNG CANCER,
 DO NOT LET THEM FOOL YOU)
- 1998年 厚生省によると、

> WHO、並びにIARCのこの研究に対します公式の表明はやはり受動喫煙は肺がんを増加させるというものでございまして、これは既にお配りいたしましたが、1998年3月9日付のWHO本部のプレスリリースによって公表されております。

(98/06/26 第7回 21世紀のたばこ対策検討会)

1998年 JT 取締役は言いました。「害自体はないのではないか...」

大河喜彦委員

> 受動喫煙の害ということであれば、例えば、ではどのぐらい害がはっきりしているかということになろうかと思いますけれども、最近WHOの付属機関IARCが出した報告でも肺がんと受動喫煙のオッズ比は 1.16 なのですね。これはノットシグニフィカント有意でないということでございまして、他にもだいたいこの手のオッズ比は非常に限りなく1に近いということで、害自体はないのではないかという報告が国際的にも非常に出て...

(98/06/26 第7回 21世紀のたばこ対策検討会)

1998年 日本たばこ産業が設置した財団法人喫煙科学研究財団の研究審議会長 原澤道美東京大学名誉教授は大蔵省の審議会で次のように報告しました。

> 受動喫煙に関する研究でありますが、受動喫煙の健康影響に関しては、 疫学研究の結果として肺がんの発生リスクを高めるとする報告がある一方、 そのような影響は認められないとする報告も少な〈ありません。 (平成10年9月28日「たばこ事業等審議会懇談会」議事録)

1998年 日本たばこ産業から喫煙科学研究財団を通じて研究費の供与を受けている宮崎医科大学 の常俊義三は大蔵省の審議会で次のように報告しました。

宮崎医大の常俊でございます。一番最後のページに、これは調査規模としては一番大きな調査になるだろうと思いますが、IARCが最近出しました報告が出ております。…これはIARCがやった一番最近の事例でありますけれども、この結果では、むしろ受動喫煙の影響というのは見られないという結果が出てまいります。

(平成10年11月17日たばこ事業等審議会懇談会(第3回)議事録)

1998年 鹿児島大学医学部公衆衛生学教室の秋葉澄伯は述べました。

(タバコ病訴訟第 17 回口頭弁論(2001 年 7 月 17 日)で言及された)

受動喫煙が肺癌リスクを増加させることは 1981 年に初めて平山博士やガーフィンケル、トリコポウロスらにより独立に報告された。その後、この問題に関する多数の論文が発表されたが、未だにこの問題については結論は出されていない。最近は相対リスクやオッズ比が 1 を切る結果も報告されているが、これは受動喫煙が肺癌を予防する可能性を示唆する

(**秋葉澄伯**: 疫学研究は個人レベルでの因果関係を評価できるか. 環境と健康 1998;11: 120-132.)

2000年 権威ある医学誌 The Lancet (8 April 2000)には...

「タバコ産業は IARC の受動喫煙研究を中傷している」という報告が掲載されました。

(Tobacco industry efforts subverting International Agency for Research on Cancer's second-hand smoke study Elisa K Ong, Stanton A Glantz Lancet 2000; 355: 1253-59)

2000年8月2日 世界保健機関(WHO)の専門家委員会は言いました。

米国のフィリップ・モリスや日本たばこ産業(JT)など大手たばこ会社が豊富な資金力を利用し、WHOなどさまざまな国連機関の反たばこ政策への組織的な妨害工作を行っている...

2000年 米厚生省は「発がん物質報告第9版」を発表しました。

そして、間接喫煙の煙などを新たに発がん物質などに指定しました。(米厚生省、5月15日)

- 2000年 JT が「WHO たばこ対策枠組み条約に対するコメント」をWHOへ提出。 (JT、8月29日) 「環境タバコ煙が健康に有害だということを示す証拠は得られておりません...」
- 2000年 WHOのBulletin誌に平山博士の賞賛記事が掲載される。

「約20年前に発表された平山博士のパイオニア的な受動喫煙と肺がんの関係に関する研究は時の試練に耐えて持ちこたえている」

(Hirayama's work has stood the test of time, Bulletin of the World Health Organization, 2000)

2001年 WHO 長官 Dr Gro Harlem Brundtland さんは言いました。

IARC が1990年代にヨーロッパで受動喫煙と肺癌の関連について調査を行っていた時、タバコ会社はタバコ規制が加速され、タバコの売上が減少することを恐れました。このため、タバコ会社は1993年から1998年のIARC報告書を否定する活動を開始しました。タバコ会社はメディアを利用して受動喫煙の危険を否定しており、現在も継続されています。私はIARCを賞賛します。IARCが1987年に報告した「受動喫煙の危険性」は正しい内容であり、私達はIARCに強力な支援を行います。

(May 2001 42nd Governing Council, International Agency for Research on Cancer) http://www.who.int/director-general/speeches/2001/english/20010510_iarc42council.en.html

2002年 6月 WHO の癌研究部門 IARC は受動喫煙の煙(INVOLUNTARY SMOKING)を明白な発癌物質(Group 1)に分類しました。

「受動喫煙や環境タバコ煙の吸入が肺癌を発生させる十分な証拠がある」

"There is sufficient evidence that involuntary smoking (exposure to secondhand or 'environmental' tobacco smoke) causes lung cancer in humans."

- 2002年 タバコ産業による受動喫煙の害を隠すプロジェクトを非難する記事が、英国の医学誌 BMJ、インディペンダント紙、反タバコ団体 ASH や Tobacco Free Kids の HP 等に掲載されました。このプロジェクトには2人の日本人(矢野榮二1)、香川順2)が関与していました。
 - 1) 帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教授
 - 2)東京女子医科大学衛生学公衆衛生学教授

(Mi-Kyung Hong,Lisa A Bero. How the tobacco industry responded to an influential study of the health effects of secondhand smoke; *BMJ* 2002;325:1413-1416 (14 December))

平山雄の研究は時の試練に耐えて持ちこたえている(WHO)

Public Health Classics

This section looks back to some ground-breaking contributions to public health, reproducing them in their original form and adding a commentary on their significance from a modern-day perspective. To complement this month's theme of the *Bulletin*, Elisa Ong and Stanton A. Glantz review the 1981 paper by Takeshi Hirayama on the risk of lung cancer from passive smoking. The original paper is reproduced with permission from the *British Medical Journal*.

Hirayama's work has stood the test of time

Elisa Ong1 & Stanton A. Glantz2

Bulletin of the World Health Organization, 2000, 78 (7)

930

平山雄による最初の報告以降、受動喫煙と肺癌に関する研究が37件発表されています。しかし、言うまでも無く、タバコ産業は受動喫煙が肺癌の原因になるという結論を一貫して否定し続けています。国際癌研究機関(IARC)は最近、平山雄の研究と同様な研究を発表し、受動喫煙が癌の原因になるという膨大な証拠をさらに強固なものにしました。IARCがこの報告書を発表するまでの数年間、タバコ産業は世界中のタバコ対策を妨害するため、虚偽の医学情報を流す悪辣なキャンペーンを行い、平山雄を中傷しました。平山雄の報告から約20年が経過しましたが、タバコ産業による様々な中傷にもかかわらず、受動喫煙は肺癌の原因になるという平山雄の結論は時の試練に耐えて持ちこたえています。

Hirayama's work has stood the test of time

Since publication of Hirayama's original paper, 37 studies of passive smoking and lung cancer have been published (16). Yet, needless to say, the tobacco industry continues to fight against the conclusion that second-hand smoke causes lung cancer. Recently the International Agency for Research on Cancer (IARC) published a study (17) similar to Hirayama's and supported the large body of evidence that secondhand smoke is a carcinogen (18). Years before the IARC report was published, however, the tobacco industry organized a sophisticated campuign against the study in an effort to prevent worldwide smoking restrictions, with the same kinds of misrepresentations it used against Hirayama (19).

Almost two decades have passed since publication of Hirayama's work and, despite the tobacco industry's best efforts, his conclusion that passive smokingcauses lung cancer has stood the test of time.

Acknowledgement

This work was supported by NCI Grant CA-61021.

Table 1. Risk of lung cancer in passive smokers: results of study by Hirayama (1) confirmed by major international consensus reports

Report	Year	Country	Relative risk	Confidence interval ^a
Hirayama (1, 9, 10)	1981	Japan		
1-19 cigarettes a day			1.61	1.09-2.39
20 cigarettes a day or more			2.08	1.39-3.11
US Environmental Protection Agency (20)	1992	USA	1.19	1.01-1.39
National Research Council (13)	1986	USA	1.34	1.18-1.53
Surgeon General (12)	1986	USA.	1.53	na.
California Environmental Protection Agency (2 f)	1997	USA	1.20	na
National Health and Medical Research Council (22)	1997	Australia	1.32	1.10-1.69
Scientific Committee on Tobacco and Health (23)	1998	UK	1.20-1.30	na

^{*} Confidence intervals are two-tailed 95%, except US EPA which is one-tailed 95% (two-tailed 90%).

na = not available.

(Hirayama's work has stood the test of time, Bulletin of the World Health Organization, 2000)

タバコ産業から金銭を供与された医師は受動喫煙の害を否定する

1981年、日本人の研究者、平山雄は受動喫煙と肺癌に関するコホート研究を発表しました。これは、日本での、喫煙者と結婚した非喫煙女性の調査でした。この研究はタバコを吸わない女性が喫煙者と結婚すると、肺癌を発症する危険が最高2倍に増加し、量・反応関係も認められると結論する内容でした。平山雄の研究は影響力があり、膨大な議論を巻き起こしました。この論文は、タバコ規制、リスクアセスメント、そして報道などで最も多く引用された論文の1つです。タバコ産業は受動喫煙の有害性に関する議論に決着が付かないよう、様々な戦略を講じています。

受動喫煙の有害性に関する議論で特筆すべきことは、受動喫煙の害を否定する医師のほとんどがタバコ産業から何らかの形で金銭を供与されていることです。1998年、米国の医学雑誌 JAMA にタバコ産業から研究資金をもらった研究者は、そうでない研究者に比べて、88.4倍も多く受動喫煙の危険性を否定する論文を書いていたという論文が発表されました。

http://jama.ama-assn.org/issues/v279n19/abs/jrv71060.html

Why Review Articles on the Health Effects of Passive Smoking Reach Different Conclusions
Deborah E. Barnes, MPH; Lisa A. Bero, PhD

論文の要約

目的

著者が資金をもらうことが受動喫煙の健康影響に関する論文の結論に影響を与えるかどうかを調査した。

調査対象

MEDLINE・EMBASE データベースに登録されている1980年から1995年の間に報告された受動 喫煙の健康影響に関する研究論文。

検索条件

論文の趣旨として、受動喫煙と1つ以上の健康影響の関係を検証している論文を検索した。受動 喫煙と健康影響の関係を検証していない論文や英語以外の言語で書かれた論文は除外した。

データ抽出

著者の研究資金の出所毎に論文の結論を分類した。著者がタバコ産業から研究資金をもらっているか、あるいは、タバコ産業のスポンサー活動に参加しているかなどに基づいて、著者とタバコ産業の関係を分類した。

"Author affiliation was classified as either tobacco industry affiliated or not, based on whether the authors were known to have received funding from or participated in activities sponsored by the tobacco industry."

データ解析

106の研究論文を調査した。37% (39/106)の論文は受動喫煙は危険ではないと結論していた。受動喫煙は危険ではないと結論した著者の 74% (29/39)はタバコ産業から研究資金を受け取っていた。multiple logistic regression analyses を用いて、peer review、主題、報告年月、等を調整して論文を解析したところ、論文の結論に影響を与える最大の因子はタバコ産業から研究資金をもらったであった。タバコ産業から研究資金をもらった研究者は、そうでない研究者に比べて、88.4 倍も多く受動喫煙の危険を否定する論文を書いていた。

"the only factor associated with concluding that passive smoking is not harmful was whether an author was affiliated with the tobacco industry (odds ratio, 88.4; 95% confidence interval, 16.4-476.5; P<.001)."

結論

論文の結論と著者がタバコ産業から研究資金をもらっていることの間には強い関連が認められた。

"The conclusions of review articles are strongly associated with the affiliations of their authors." よって、著者は論文を書〈際には研究資金の出所を明記すべきである。読者もまた著者の研究資金の出所を考慮して論文の正当性を判断すべきである。

JAMA. 1998;279:1566-1570 Vol. 279 No. 19, May 20, 1998

受動喫煙の害を隠すプロジェクト

~ プロジェクトの概要 ~ BMJ12月14日号に掲載された記事

2002年12月14日、英国の医学誌 BMJ には、受動喫煙の害を隠すタバコ産業のプロジェクトを明らかにした論文が掲載されました。

http://bmj.com/cgi/content/full/325/7377/1413



1981年、日本の権威ある研究(平山雄の研究)により受動喫煙と肺癌の因果関係が明らかにされました。この論文は、受動喫煙の害を隠すため、人々を欺く論文を作成したタバコ産業について述べたものです。

受動喫煙の害を隠すプロジェクトは1991年、矢野榮二(帝京大学)と香川順(東京女子医科大学)が、タバコ産業に提案したことから始まったようです。興味深いことに、受動喫煙の害を否定し続けている春日斉もまた、同年より、日本たばこ産業の嘱託者となります。

大きく報道された受動喫煙の害を隠すプロジェクト

まずはじめに、2002年12月13日に英国の新聞インディペンダント紙が報道した受動喫煙の害を隠すプロジェクト読んでみましょう。

http://www.independent.co.uk/story.jsp?story=361095

Health study 'discredited by secret tobacco plot'

By Cahal Milmo

13 December 2002

タバコ産業は、受動喫煙が癌の原因になるという歴史的発見を中傷する報告書の作成を依頼し、 受動喫煙の害を隠したと、有名な医学雑誌は非難しました。数年間に及ぶタバコ産業への法的措 置を通じて得られた文書により、タバコ産業は「受動喫煙の害を否定する報告書の作成に報酬を 支払った」ことを認めました。

この報告書は 1981 年の平山雄の報告、「喫煙者と結婚した女性は非喫煙者と結婚した女性に比べ、肺癌の危険が2倍に増加する」と、矛盾するように作成されました。

British Medical Journal 誌によれば、タバコ産業は受動喫煙と肺癌の関係を明確に否定する研究報告書の作成を希望しました。

米国の研究者が入手した内部文書によれば、日本人研究者が報告書を作成し、大手タバコ産業が報酬を支払いました。この文書は、タバコ産業から CIAR(屋内空気研究センター)というタバコ産業が設置した外部団体を通じ、報酬が支払われたことを示しています。

1991年のタバコ産業重役のメモには、CIARが直接、報告書の報酬を支払うことは出来ませんが、「CIARがスポンサーになるのは、タバコ産業の関与を隠すためだという理由があるようです。1つは、CIARを利用してプロジェクトを隠したいのでしょう。それを急ぐことは重要だと思います」と書かれています。

CIAR による不適切な行為を示唆する証拠はありません。研究者によれば、受動喫煙の害を隠すプロジェクトには他の大手タバコ産業も関与したという証拠もあります。

あるメモによると、タバコ産業の研究者 Chris Proctor さんは、平山雄の研究の信用を失墜させる プロジェクトの黒幕だったようです。完成した報告書は「受動喫煙が肺癌の危険を増加させるという直接的な証明は無く、平山雄の研究は非科学的であると結論しました」。そして、タバコ産業は Dr Proctor さんの関与を隠そうとしたようです。 カリフォルニア大学の2名の研究者によって書かれた BMJ の記事によれば、タバコ産業のために、 英国のコンサルタントの名前で発表された 1993 年の報告書は、タバコ産業が後援していたことが 知られています。

この報告は、日本人研究者により初期原稿が書かれましたが、Dr Proctor さんは、5000ドルの報酬を受け取ったこのコンサルタントが著者であると語っていました。

BMJ の記事に利用されている文書についてタバコ産業は本物であると認め、平山雄の研究を科学的に検証していると語りました。

タバコ産業のスポークスマンは「これは合法的活動です」と、語りました。タバコ産業は報告書の中にタバコ産業の関与を明記していると語りました。「公表された報告書にはタバコ産業が報酬を支払ったことが明記されています」と、語りました。

WHOも非難した受動喫煙の害を隠すプロジェクト WHO は、タバコ産業に雇われた医師が、受動喫煙の害を隠し、国民を欺いていると非難しました。

下記はロイター報道です。

http://www.reutershealth.com/archive/2002/12/19/eline/links/20021219elin013.html

PAHO: Tobacco firms lied to Latin Americans タバコ産業はラテンアメリカで嘘を広めています。

Last Updated: 2002-12-19 14:00:35 -0400 (Reuters Health)

By Charnicia E. Huggins NEW YORK (Reuters Health)

国境を越えて活躍するタバコ産業は、受動喫煙が肺癌、その他の深刻な疾患を引き起こすことを隠すため、医師を雇い、ラテンアメリカとカリブ海諸国の国民に嘘の医学情報を流していると、WHO の地方機関である Pan American Health Organization (PAHO)は発表しました。 "deceive the public about the link between secondhand smoke and lung cancer"

タバコ産業は、嘘を広めている医師が、タバコ産業に雇われていたことを隠していました。 タバコ産業は、客観性と中立性を装う、コンサルタントと医師を利用し、メディアや様々 な政府機関と接触し、嘘を広めていると、この報告書は述べました。

事実、タバコ産業の重役のメモには、「このプロジェクトにおいて、タバコ産業がこれらの 医師と接触したことが無いと断言することが絶対に必要です。しかし、そのように断言す ることは不可能です... 前回説明したように、タバコ産業は全ての医師と、ワシントンD Cの本社法務部を通じて接触しています」と、書かれていました。

「これは、過去10年に渡り、ラテンアメリカおよびカリブ海諸国において、タバコ産業が行った、医師を利用して国民に誤った医学情報を流すキャンペーン "deceptive campaigns"のほんの一部です」と、PAHOの「人命を奪い収益を上げる」(Profits Over People)という報告書は述べました。

この報告書は1万ページ以上に及ぶタバコ産業の内部文書の調査に基づいています。協同 執筆者の Stella Aguinaga Bialous さんは「この発見はそれほど驚くべきものではありま せん。医師を利用して国民に誤った医学情報を流す戦略は米国でも行われており、報告さ れています」。驚くべきことに、「タバコ産業の影響力はラテンアメリカ全土に及んでいます」と、彼女は語りました。

これはタバコ産業がラテンアメリカとカリブ海諸国においても、医師を利用して国民に誤った医学情報を流すキャンペーンを行っていることを示した初めての包括的な報告書です。「ラテンアメリカの多くの国々はタバコ産業に関する十分な情報を持っていません。タバコ産業に関する情報不足が、タバコ産業にとって有利になることは明白です」と、California-based PAHO consultant の Bialous さんは語りました。

例えば、大手タバコ産業はこの二つの地域において、「タバコ広告規制、分煙、タバコ税増 税などは効果的な喫煙率減少につながらない」と主張しています。タバコ産業は蓄積され た科学的根拠を無視し、事実に反する情報を選んで流しています。

しかし、実情は、タバコ産業の重役は、これらの政策がタバコ産業の収益を脅かす3大脅威(タバコ広告規制、分煙、タバコ税増税)であることを認識していると報告書は述べています。

事実、1994-1996年のタバコ産業の経営戦略には次のように記されています。「"目標"は、分煙やタバコ広告禁止、そしてタバコ販売促進活動の規制を目的とした都合の悪い規制を防ぐことです」

しかし、Bialous さんと共著者の Stan Shatenstein さんは、タバコ産業による"最も卑怯な戦略"は未成年喫煙防止キャンペーンであると語ります。タバコ産業は未成年喫煙防止キャンペーンを利用し、「タバコは大人になってから」というメッセージを子供たちに伝えていますが、ニコチンの依存性やタバコの害に関する情報は一切伝えないと語りました。

Bialous さんは、タバコ産業による未成年喫煙防止キャンペーンは単なる「タバコ宣伝」であると、語りました。

ラテンアメリカとカリブ海諸国は「巨大なタバコ産業は、本当に、利己と収益のために存在していることを認識する必要があります」と、彼女は付け加えました。

結果として、タバコ産業による予防接種の寄付を含む、ありとあらゆる慈善活動について も、疑いの目で見る必要があります。

「タバコ産業がそのような慈善キャンペーンの背後にある場合、 慈善活動が目的であることは決してありません」

タバコ産業が官僚に圧力を加えているということも明らかになり、タバコ産業の真の姿が明るみになるにつれて、Bialous さんは政治家にタバコ対策の推進を要求するようアドバイスしています。国民は、「政府代表が、タバコ産業の提案する公衆衛生政策を受け入れていないか明らかにすべきです」と、語りました。

PAHO Director の Dr. George Alleyne さんは、「PAHOと政府は、公衆衛生行政のために、信頼できる、タバコ産業から独立した、専門家の意見を聞く責任があります」と、語りました。

「タバコ産業にとって公衆衛生行政は、収益と大きく関係しており、信頼できる専門家で はありません」

受動喫煙の害を隠すプロジェクト

The Center for Indoor Air Research (CIAR)とは

タバコ産業は法律の制定と訴訟の場面で利用できる科学的データを作成するため、CIARを通じて特別に吟味されたプロジェクトに資金を供与していました。

「環境タバコ煙は有害ではない」というタバコ産業の立場を支持する科学的データ作成するため、 タバコ産業は CIAR を利用していたようです。

"the tobacco industry might be using CIAR to develop scientific data to support its position that ETS is not harmful to health"

(Barnes DE, Bero LA. Industry-funded research and conflict of interest: an analysis of research sponsored by the tobacco industry through the Center for Indoor Air Research. J Health Polit Policy Law 1996; 21: 515-542)

CIARは資金供与により環境タバコ煙に関する論文作成を支援しました。しかし、CIARが支援する論文はタバコ産業の立場で書かれ、分煙を阻止する根拠として利用されました。 我々の発見によれば、タバコ産業は法律の制定と訴訟の場で利用できる科学的データを作成するため、CIARを通じて、特別に吟味されたプロジェクトに資金を供与していました。

"CIAR's special-reviewed projects are more likely than its peer-reviewed projects to be related to ETS, to support the tobacco industry position, and to be used by the industry to argue that smoking should not be regulated in public places."

"Our findings suggest that the tobacco industry is funding special-reviewed projects through CIAR to develop scientific data that it can use in legislative and legal settings."

(Barnes DE, Bero LA. Industry-funded research and conflict of interest: an analysis of research sponsored by the tobacco industry through the Center for Indoor Air Research. J Health Polit Policy Law 1996; 21: 515-542)

(参考)

- 1987年 国際癌研究機関(IARC)はタバコ煙を明白な発癌性物質[Group1]と認定しました。
- 1988年 英国の政府諮問委員会はETSが非喫煙者の肺癌を10~30%増加させると結論しました。
- 1988年 日本たばこ産業が助成する、昭和 63 年度喫煙科学研究財団研究年報によると、妊婦に対する受動喫煙の害が明らかになりました。

1988年 米国タバコ産業により The Center for Indoor Air Research (CIAR)が設置される。

(Barnes DE, Bero LA. Industry-funded research and conflict of interest: an analysis of research sponsored by the tobacco industry through the Center for Indoor Air Research. J Health Polit Policy Law 1996; 21: 515-542)

受動喫煙の害を隠すプロジェクト

プロジェクトの始まり

BMJ誌によると、受動喫煙の害を否定するプロジェクトは矢野榮二と香川順が Center for Indoor Air Research (CIAR) に資金提供を提案したことが発端です。

Funding the Japanese spousal study

The Japanese spousal study seems to have originated as a grant proposal submitted to the Center for Indoor Air Research (CIAR) by Japanese investigators Eiji Yano and Jun Kagawa. This centre, created in 1988, was funded by the tobacco industry to support indoor air research, and some projects were selected for funding by tobacco industry executives. Memos from Robert Pages and T S Osdene of the research and development team at Philip Morris to Steven Parrish, senior vice president of Philip Morris, describe deliberations about CIAR funding for the study:

BMJ VOLUME 325 14 DECEMBER 2002 bmj.com

CIARとはタバコ産業が屋内空気の研究を支援するため、1988年に設置された研究財団です。 タバコ産業の重役はCIARを利用して、いくつかのプロジェクトに資金を提供していました。

資金を提供したCIARのメモには矢野榮二と香川順の提案について次のように書かれています;

This is *not* a project that should be funded by CIAR, although there *may* be (I'm not convinced yet) a reason to say it was sponsored by CIAR so as to "hide" industry involvement [emphasis in original].¹⁵

「これはCIARが資金提供すべきプロジェクトではありません。恐らく、確信は持てませんが、タバコ産業の関与を隠すためでしょう(原文は強調印字)」

(Pages R. Re: Japanese spousal study and Chris Proctor as the `behind the scenes' study director and potential CIAR funding [letter]. Philip Morris. 15 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544456.)

1991年4月5日 矢野榮二と香川順からタバコ産業への提案:

SENT BY

: 4- 5-91 : 3:23PW :

ETS/BGTO+

8042742921:# 2

84/25/1991 15:42 FROM COUINDTON & BURLING

919197418719 P.23

PRODOGAL FOR AN APPLIED RESEARCH STUDY TO INVESTIGATE EXPOSURE TO ENVIRONMENTAL TORACCO SHOKE IN NON-ENCEING JAPANESE WORES.

Principal scientists:

Professor Riji Yano, Department of Public Health, Teikyo University, 2-11-1, Kaga, Itabashi-ku, Tokyo 173, Japan.

Professor Jun Kagawa, Department of Hygiene and Public Health, Tokyo Women's Medical College, 8-1 Kawada-Cho, Shijuku-Ku, Tokyo 162, Japan.

矢野榮二、香川順の所属、住所が明記されている。

矢野 榮二 教授

疫学者、呼吸器専門家、帝京大学医学部衛生学公衆衛生学

香川順 教授

疫学者、医師、呼吸器専門家、東京女子医科大学 衛生学公衆衛生学 (Philip Morris. Proposal for an applied research study to investigate exposure to environmental tobacco smoke in non-smoking Japanese women. Covington and Burling. 5 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544477_4481.)

矢野榮二と香川順によるこのプロジェクトの「見積書」

BUDGET.

This is currently a tentative estimate of the cost of completing to complete this project. All sums are in U.S. dollars.

「お支払いは米国ドルでお願いします」と書かれている。

Total estimated budget

243,000

矢野榮二と香川順がこのプロジェクトに要求した費用は24万3千米国ドルだった。

(Philip Morris. Proposal for an applied research study to investigate exposure to environmental tobacco smoke in non-smoking Japanese women. Covington and Burling. 5 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544477_4481.)

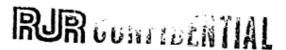
1991年4月5日 矢野榮二と香川順によるタバコ産業への提案に対するタバコ産業の反応 ~ CIAR会議でのプレゼンテーションが決まる~

SENT BY	; 4- 5-81 ; \$*2	2PN ;	ETS/64TÇ+	89427429211# 1
	$\rho a = 0$	OSDENE 5 , 1991:	Churien H. Gre Bowmen Grey Technic Ridg. 815- Winston-Balon, Telephone: 818 Tulufac: 818	001 Contor 130/1018 HC 27102 -741-4070
	DATE:	April 5, 1991		
	TO ₂	Des. Tom Order	e & Bob Pages	
	COMPANY	Philip Morris U	SA	
	FAX NUMBER:	804/274-2921		
	FROM:	Charles R. Gree	-	
	PAGES (including cover):	6		
	COMMENTS: Tom and But	the more	ed was sent	to me
	ly Dr. Prostor. He aland	to wale a	arrentation at	the
	CIAR Board meeting.	Saulari	venues to a	ot ou
1	international bolly in	wheel in-	the landing	
-	U		0. \$	

Tom さん Bob さん、この提案が Proctor さんから送られてきました。CIARO会議でこの提案についてのプレゼンテーションを計画しています... CR Green より

1991年4月9日

矢野榮二と香川順の提案について(タバコ産業の文書より)



C. R. Green

April 9, 1991

ETS DIVISION WEEKLY HIGHLIGHTS

Japanese Spousal Smoking Study - Status: A proposal has been received from Dr. C. J. Proctor on behalf of Professor Eiji Yano, Department of Public Health, Teikyo University and Professor Jun Kagawa, Department of Hygiene and Public Health, Tokyo Women's Medical College. The primary objective of this research would be to quantify the amount of ETS to which non-smoking Japanese women are exposed during the course of a typical week by measuring airborne nicotine and salivary cotinine. Significance: Results from this study compared to those from U.S. and European studies could answer questions concerning differences in ETS epidemiologic outcomes between Asian and Western populations. Next Steps: Attempts are in progress to find funding for the proposed Japanese study.

日本人妻の研究-状況:矢野榮二 帝京大学 公衆衛生学教授と香川順 東京女子医科大学 衛生学公衆衛生学教授からの提案を C.J.Proctor さんから受け取りました。この研究の主目的は、タバコを吸わない日本人女性が曝露される環境タバコ煙を、空気中ニコチンと唾液中コチニン測定により定量することです。重要性:この研究結果を米国やヨーロッパの同様な研究と比較することにより、アジアと西洋では環境タバコ煙に関する疫学調査の結果に差異が見られる理由を明らかにすることが出来るでしょう。

今後の対応;提案された日本の研究に資金供与する方法を検討中です。

(Green CR. ETS Division weekly highlights [April 9, 1991] RJ Reynolds. 9 Apr 1991. Legacy Tobacco Documents Library/RJ Reynolds documents. Bates No 513238393_8394.)

「見積書」に対するタバコ産業の反応

Date: 12 August 1991

To: S. Parrish

From: R. A. Pages

Subject: Japan Exposure Assessment Study

日本人妻の研究について

The day following the meeting B&W called Proctor and said that they could not support the study. Later BAT said that they were still supportive, but had no 1991 money available to pay their share.

会議の後、B&W社はProctor を呼びこの研究を支援できないと言いました。そして、BAT社は支援したいが1991年の予算に余裕が無く負担金を払えないと語りました。 (Pages R. Japan exposure assessment study. Philip Morris. 12 Aug 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544519.)

「見積書」に対するタバコ産業の反応

~ プロジェクト価格の交渉~

しばらく議論した後、タバコ産業はこの研究に資金を提供することに合意しました。

R. J. REYNOLDS TOBACCO INTERNATIONAL - WINSTON-SALEM, NC

DATE:

August 22, 1991

TO:

Tom Griscom

FROM:

Richard J. Marcotullio

SUBJECT: International ETS Management Committee (IEMC

日本人妻の研究に関する最終的な決定が下されようとしています。タバコ産業各社の負担 金が次のように決定しました。

We are close to finalizing decisions for the Japan Spousal Smoking Study. We now have the following commitments:

- o RJR \$27,000 of in-kind services; \$20,000 cash contribution
- o BAT \$10,000 for 1991; unable to commit yet to an additional \$26,000 for 1992 but will try to come up with something
- o Reemtsma \$20,000 total
- o Imperial Tobacco \$20,000 total
- o Rothmans \$35,500 total, all to be paid in 1991
- o Philip Morris \$32,000 in 1991; some additional amount in 1992

矢野栄二と香川順は24万3千ドルを要求しましたが、タバコ産業は全額を払えなかった ようです。あるタバコ会社は負担金の一部を物納や分割払いで支払いました。

ご契約の内容は次のとおりです。

RJR 様;2万7千ドル相当の物納と現金2万ドル。BAT 様;1991年中に1万ドル、翌年2万 6 千ドル。Reemtsma 様; 2 万ドル。Imperial Tobacco 様; 2 万ドル。Rothmans 様; 3万5千5百ドル。Philip Morris 様: 1991年中に3万2千ドル、1992年にも小額。

(Marcotullio RJ. International ETS Management Committee budget for Japanese spousal study. RJ Reynolds. 22 Aug 1991. Legacy Tobacco Documents Library; RJ Reynolds Documents. Bates No. 507782317_2318.)

WHO の文書に記された受動喫煙の害を隠すプロジェクトの概要 プロジェクトの目的は平山雄の信用を失墜させることであり、メンバーは平山雄の報 告が正しいことを知っていました。

Public Health Classics

This section looks back to some ground-breaking contributions to public health, reproducing them in their original form and adding a commentary on their significance from a modern-day perspective. To complement this month's theme of the Bulletin, Elisa Ong and Stanton A. Glantz review the 1981 paper by Takeshi Hirayama on the risk of lung cancer from passive smoking. The original paper is reproduced with permission from the British Medical Journal.

Hirayama's work has stood the test of time

Elisa Ong1 & Stanton A. Glantz2

In January 1981, Takeshi Hirayama published his epidemiological study demonstrating that second-hand smoke increased the risk of lung cancer in non-smoking Japanese women married to men who smoked compared with non-smoking women married to non-smoking men (1). Hirayama is generally

1981 年1月、平山雄は、喫煙する男と結婚した非喫煙女性が肺癌になりやすいことを証明する疫学研究を発表しました。

Moving well beyond its usual efforts to create controversy about scientific studies that reach bothersome conclusions, the tobacco industry responded with a multimillion-dollar advertising campaign designed specifically to discredit Hirayama's paper (4). The industry commissioned epide-

平山雄の報告はタバコ産業にとって厄介な問題でした。タバコ産業は平山雄の厄介な結論に対する反論を作成したのみならず、数百万ドルの資金を投じて、平山雄論文の信用を失墜させるため、念入りに企画された宣伝キャンペーンを行い応酬しました。

American population (5). This campaign was particularly cynical since it was run despite the fact that the industry's own scientists, after reviewing Hirayama's work, concluded "Hirayama is a good scientist and his non-smoking wives publication was correct" and "that Hirayama was correct, that TI [Tobacco Institute] knew it, and that TI published its

このキャンペーンは皮肉でした。タバコ産業自身が雇った科学者が平山研究を吟味して、「平山は 良い科学者です。彼の非喫煙妻に関する論文は正しい」、「平山は正しい」と、結論していました。 (Hirayama's work has stood the test of time,Bulletin of the World Health Organization, 2000)

1991年4月5日 矢野榮二と香川順の提案に書かれていること

BACKGROUND TO THE PROPOSED STUDY.

Spidemiologic studies that have considered an association between exposure to environmental tobacco smoke ("ETS") and lung cancer have been performed in Asia, Europe and in the U.S. It is striking that meta-analysis of the Asian studies suggest a statistically significant association while a similar combined analysis of the European and U.S. studies shows no significant association. In particular, this contrast exists between the two large cohort studies performed by Hirayama in Japan and Garfinkel in the U.S. It has been suggested that the Hirayama study found significance because

202354447

i

矢野榮二と香川順は受動喫煙が肺癌の原因になること、そして、平山雄の研究が妥当であることを知っていたようです。

BACKGROUND TO THE PROPOSED STUDY

提案(プロジェクト)の背景

環境タバコ煙(ETS)曝露と肺癌の関連を調べる疫学研究がアジア、ヨーロッパ、そして米国で実施されました。これによると、アジアの研究をメタアナリシスした場合、受動喫煙と肺癌の因果関係は統計的に有意な結果が得られますが、一方、ヨーロッパや米国の研究を同様にメタアナリシスしても有意にはならないという特徴があります。この違いは、特に大規模コホート調査である、日本の平山雄と、米国の Garfinkel の調査において認められます。平山雄の研究では統計的に有意な結果が得られた理由として、日本人女性は米国人女性よりも高い濃度の環境タバコ煙に曝露されていること(なぜならば、日本の家屋は狭く、喫煙する夫との距離が非常に近いからです)、そして、日本ではタバコを吸わない夫と結婚した非喫煙女性が屋外で環境タバコ煙に曝露されることは、米国人女性と比べて、ほとんど無いからでしょう(日本では喫煙する女友達は少なく、働く女性も少ないのです。これは日本のケースコントロールスタディの大きな特徴です)。しかし、このような仮説を、科学的手法により、日本人女性とアメリカ人女性の間にこのような差が存在する(あるいは、コホート調査が行われた1960年代に存在した)ことを証明することは難しいでしょう。

(Philip Morris. Proposal for an applied research study to investigate exposure to environmental tobacco smoke in non-smoking Japanese women. Covington and Burling. 5 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544477_4481.)

1991年4月15日 矢野榮二と香川順の提案に対するタバコ産業の反応

タバコ産業の内部文書に書かれていたこと;

「研究に協力してくれる2名の日本人がいます。Chris Proctor さんが黒幕になるでしょう。ここ数年、受動喫煙について平山雄が報告した結論と矛盾するデータを作成する良いチャンスです。日本人妻だけでなく、ヨーロッパや米国についても同様です」

There are two Japanese listed as co-principal investigators. Chris Proctor [chief scientist, British American Tobacco] would be a "behind-the-scenes" study director . . . I think there's a very good chance that it will generate data which shows that ETS exposure in nonsmoking Japanese women is not much different from that of European or US women_contrary to what the apologists for Hirayama have been saying all these years.

(Pages R. Re: Japanese spousal study and Chris Proctor as the `behind the scenes' study director and potential CIAR funding [letter]. Philip Morris. 15 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544456.)

1991年4月16日

矢野榮二と香川順の提案について ~ 日本たばこ産業への協力依頼 ~

日本たはことを MANAGEMENT CORP. APR 16 1991 CORRESPONDE RICA. PAGES PHILIP MORRIS MANAGEMENT CORP. INTEROFFICE Richmond, Virginia

Date: April 16, 1991 To: Steve Parrish

T. S. Osdene From:

Subject: Investigation of Exposure to ETS in Monsmoking Japanese Women

題:非喫煙日本人女性における環境タバコ煙曝露の研究

At the recent meeting of CIAR, the cited subject was discussed at some length. The proposal was made to CIAR and it was decided at the time that it was very worthwhile to undertake the study; however, the question arose whether CIAR should fund it. It is my opinion that this study should be funded by the South Eastern Asia group since it is being conducted in the Far East.

表題について先ほどのCIAR会議である程度議論されました。CIARに提出されたこの提案を引き 受ける非常に高い価値があります。しかしながら、これはCIARが金銭を供与すべきものなのかと いう疑問が生じました。私の意見では、この提案は極東で実施されるものであり、東アジアのグル ープが資金を提供すべきであると思います。

One may wish to use a CIAR cover for this project. I believe it is very important that this be done with all due haste and could be of some appreciable help in dealing with EPA and/or OSHA. A copy of the proposal is enclosed for your information.

たぶん、CIARを利用して、このプロジェクトを隠したいのでしょう。このプロジェクトはEPAやOSH A(注:受動喫煙対策を推進する米国政府機関)への対策として明らかに利用できるため、非常に 重要で急ぐ必要があると思います。この提案のコピーを同封いたします。

that Dr. Chris Proctor might supervise this work but his presence should be low key and not appear in any of the publications, particularly since this is a Japanese study. In addition, I believe that Japan Tobacco Inc. must be advised of this study and be brought aboard since it is impossible to really undertake any work in Japan without a tacit approval.

このプロジェクトは Chris Proctor さんが指揮してくれるでしょう。しかし、彼の存在は 秘密にし、論文のどこにも明記すべきではありません。なぜなら、これは日本の研究だか らです。付け加えて言えば、**日本たばこ産業**をこの研究に誘い、協力を得なくてはなりま せん。なぜなら、実際、日本では暗黙の了解が無ければ、いかなる仕事も引き受けること が難しいからです。

(Osdene TS. Investigation of exposure to ETS in nonsmoking Japanese women. Philip Morris. 16 Apr. 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544449.)

1991年4月25日 Lee さんの提案

Lee さんは日本たばこ産業に協力を依頼し、香川順にコンタクトを取ります。

ここ5年ほどの間に、環境タバコ煙と肺癌に関する疫学研究において最も大きなバイアス源となるものは喫煙状態の誤分類であることが知られるようになってきました。

It has been well recognized for over 5 years now that misclassification of smoking status is a major potential source of bias in epidemiological studies of ETS and lung cancer. Evidence reviewed in アジアでの疫学調査によって観察された、(受動喫煙と肺癌の)関連を説明するには、アジアでは、西洋に比べて、喫煙者が非喫煙者として誤分類されることが非常に多いことを示す必要があるのは明白です...

Japan or in other Asian countries. It is clear that one needs higher levels of misclassification: than in the West to explain the observed. association seen epidemiologically in Asian studies (as is documented in 推測ですが、日本では女性の喫煙が社会的に容認されておらず、喫煙していることを否定する女性は非常に多いでしょう。しかし、これを証明する直接的な証拠はありません... 私はアジア、特に日本人女性における誤分類率に関するデータを集めることは、受動喫煙と肺癌問題を更に理解するために、最も重要であると考えます。

validated by measurement of cotinine in saliva, urine or blood. This is a <u>major</u> omission, to which I have drawn attention over the last 3 years. Indeed, I even travelled to Tokyo to encourage the JTI to do a study, but nothing ever came of this. I in fact would regard the collection of

これは(平山雄の研究の)<u>最大</u>の弱点です。私はこの問題に3年前から注目していました。 私は東京まで行き、日本たばこ産業にこの研究を行うよう依頼しましたが、今のところ返 事はありません。

to further understanding of the ETS/lung cancer issue. Demonstration of high rates in Japan would (or ought to) dramatically influence interpretation of the association seen between spouse smoking and lung cancer risk.

日本人女性の誤分類率が高いことを示せば、夫の喫煙と妻の肺癌の因果関係の解釈に、著しい影響を与えることは確実です。これらの理由により、私は日本で実施しようとしてい

る Chris Proctor さんの計画を非常に強く応援します。

For this reason I am <u>very strongly supportive</u> of Chris Proctor's plans to get a study going in Japan. His study has another major 私は Chris Proctor さんに定期的に連絡をとり、そしてともかく2ヶ月以内に香川さんに会う予定です。可能な限り科学的に正しく作成する必要がありますから、十分な時間を頂ければ幸いです。

regularly and am planning to see Kagawa in a couple of months time anyway. I would be very happy to spend such time as is necessary making it as scientificably correct as possible.

(Lee PN. Draft proposal for study to investigate exposure to ETS in non-smoking Japanese women. International ETS Management Committee. 25 Apr 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544457_4461.)

受動喫煙の害を隠すプロジェクトの黒幕 Proctor から春日斉への私信 1991年

乙第 8 号証

環境中たばこ煙による受動喫煙の疫学

春 日 斉

Epidemiological Study on Environmental Tobacco Smoke

Hitoshi KASUGA

曝露を受けた非喫煙の妻のOdds 比がネガティブの報告: Wu^{tor}(1990), 0.7, 祖父江²¹⁷(1990), 0.94, 清水²⁶⁷(1988), 1.1 を NRC の19報告に加えると, 有意でなくなる可能性ありと Proctor (1991) は私信で述べている。すなわちメタ・アナリシスには Publication bias (成績がネガティブの場合, 学術誌に採用され難い bias), 故意, 不

4.2 メタ・アナリシス(Meta, analysit)¹⁷ (Table 4) 裁計的には条件が異っていても、適切なモデルを立て **發つかの別々の研究データを統合し、仮設検定を行うこ** とを Glass (1975) W がメタ・アナリシスと名付け、米国 NRC® は1986年、平山を含む Cohort 研究 3, Case-Control 研究20について検討し、論文の質に問題のない 15論文を選びスタ・アナリシスを行った。その統合相対 リスク (combined relative risk) は 1.34, Well ら199 (1988) は16論文で1.44, と何れも有意として平山の成 旗を全面的に裏づけるものとした。他方。 夫からの ETS 螺匹を受けた非要便の妻のOdds 比がネガティブの報告: Wu^{to)}(1990), 0.7, 极父江¹¹⁰(1990), 0.94, 濟水¹⁰¹(1988), 1.1 を NRC の13報告に加えると、有意でなくなる可能 性ありと Proctor (1991) は私信で述べている。すなわ ちメタ・アナリシスには Publication bias (技能がネガ ティブの場合。学術誌に採用され難い bias)。故意。不 往意により、必要な論文を見逃す bias、異る研究方法の 併合による bias, などがあり, NRC の取上げた23論文 の relative risk (RR) あるいは odds 比を凍ると20

(春日斉 環境中たばこ煙による受動喫煙の疫学 大気汚染学会誌 J.japan Soc.Air Pollut.27(4)175~ 189、1992 JR西日本分煙訴訟乙第8号証)

1991年8月12日 タバコ産業の内部文書より ~プロジェクトの目的~

この文書には、秘密が外部に漏洩しないよう、 "privileged and confidential attorney work product" というラベルが張られています。

PRIVILEGED AND CONFIDENTIAL ATTORNEY WORK PRODUCT

PROPOSAL FOR AN APPLIED RESEARCH STUDY TO INVESTIGATE EXPOSURE TO ENVIRONMENTAL TOBACCO SMOKE IN NON-SMOKING JAPANESE WOMEN.

研究の目的

非喫煙女性であると自己申告した女性集団における誤分類状況の評価

OBJECTIVES OF THE STUDY.

1. To assess the extent of misclassification of smoking status in self-determined non-smoking Japanese women.

問診、大気中ニコチン測定、そして尿コチニン測定により、非喫煙女性が曝露される環境タバコ煙量を測定する・・・

2. To: quantify the amount of environmental tobacco smoke (ETS) to which non-smoking Japanese: women are typically exposed during the course of a week through questionnaire, personal monitoring for airborne nicotine and through measurement of urinary cotinine levels.

プロジェクトの管理は Covington さんと Burling さんが行う予定です。調査は適切にデザインされ、実行され、タイミング良く完成するでしょう。 プロジェクトの管理者はあらゆる科学誌と距離を置いています。彼らは、2ヶ月毎に、支援するタバコ産業へ状況報告を行う予定です。

Two Japanese scientists will be the principal investigators. Professor Jun Kagawa is an epidemiologist, physician and respiratory specialist currently teaching medicine at the

2 名の日本人を中心に研究が行われます。香川順は疫学者、医師、呼吸器専門家、現在は 東京女子医科大学衛生学公衆衛生学教授です。彼の研究室は尿中コチニンを測定した経験 があります。このプロジェクトでは、香川順教授がサンプルの分析を行い、報告書を書く 予定です。

Department of Hygiene and Public Health, Tokyo Women's Medical College. His research laboratory has experience with measuring urinary cotinine. Professor Kagawa's prime responsibilities within this project will be the management of sample analysis and being principal author on the resulting scientific reports.

矢野榮二教授は東京の帝京大学公衆衛生学教授で疫学者、呼吸器専門家です。矢野教授は 市場調査機関と接触し、データ収集、データベース編集、データ分析を行います。

Professor Eiji Yano is an epidemiologist and respiratory specialist based at the Department of Public Health at Teikyo University, Tokyo. Professor Yano will be the principal contact with the market research agency, will organize the data collection, the compilation of a database, and the data analysis.

Peter Lee (PN Lee) さんも、研究のデザインと解釈に関する相談を受けるでしょう。しかしながら、Lee さんが一連の研究報告書において共同執筆者になろうとは誰も予想しないでしょう。

Mr. Peter Lee also will be asked to assist in reviewing the study design and in interpreting the data. It is not anticipated, however, that Mr. Lee will serve as a co-author of any of the publications flowing from the study.

(Philip Morris. Proposal for an applied research study to investigate exposure to environmental tobacco smoke in non-smoking Japanese women [privileged and confidential attorney work product]. Covington and Burling. 12 Aug 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544523_4530.)

1991年9月12日 矢野榮二と香川順の提案について (タバコ産業の文書より) プロジェクトの目的

RUR CONFIDENTIAL

C. R. Green

November 12, 1991

ETS DIVISION WEEKLY HIGHLIGHTS

Japanese Spousal Study - Status: The International ETS Management Committee, IEMC, has funded a two-phase research project by two Japanese scientists, Prof. Jun Kagawa (Dept. of Hygiene and Public Health, Tokyo Women's Medical College) and Prof. Eiji Yano (Dept. of Public Health at Teikyo University, Tokyo), to study smoking status misclassification and ETS exposure among nonsmoking spouses in the city of Osaka and the rural prefecture of Okayama in Japan. RJR R&D will make technical contributions by providing urinary cotinine and ETS nicotine analyses. Samples for the first phase of the study (misclassification) are currently being collected and will be delivered to RJR on Nov. 16th. Dr. Kuo-Mei Chang will determine cotinine in the 400 urine samples by the ELISA technique. Significance: Results of this study will allow us to investigate criticisms of the

Hirayama ETS epidemiology and evaluate assumptions made by the U.S. EPA in their draft health risk assessment on ETS exposure. Contact: Charles Green.

日本人妻の研究

IEMCは日本人科学者 香川順教授(東京女子医科大学 衛生学公衆衛生学)と矢野榮 二教授(帝京大学 公衆衛生学)が提案した、2段階研究、喫煙状態の誤分類に関する研究および、大阪と地方都市岡山における非喫煙者の環境タバコ煙曝露の研究に資金を供与しました。タバコ産業は尿中コチニン測定と環境タバコ煙のニコチン分析において技術協力する予定です。第一段階の研究である誤分類研究のサンプルは集まりつつあり、11月16日にはタバコ産業に届けられるでしょう。400個の尿サンプルは Kuo-Mei Chang がELISA 分析します。重要性:この研究により我々は、平山雄による受動喫煙の疫学研究と、EPAによる環境タバコ煙の健康評価の弱点を明らかにすることが出来そうです。

担当: Chales Green

(Green CR. ETS Division weekly highlights [week of November 12, 1991] RJ Reynolds. 12 Nov 1991. Legacy Tobacco Documents Library/ RJ Reynolds Documents. Bates No 507984189_4190.)

このプロジェクトで作成された論文の要約

草稿の段階では、コチニンの測定方法やカットオフ値に関連するいくつかの変更がありましたが、7つの論文の結論は全て一貫していました。この研究は受動喫煙が肺癌の危険を増やすという直接的な証拠は無いと結論しました。最終的に発表された報告書は日本人妻400人を対象とした横断研究でした。

彼女達は喫煙および受動喫煙の状況を問診され、尿中コチニン濃度を測定されました。この論文の最大の発見は、コチニンの測定により、喫煙しないと答えた女性 1 0 6 人のうち 2 2 人が誤分類されていることを示したことでした。そしてこの論文は、平山雄の研究には誤分類バイアスの可能性があり、非科学的であると結論しました。

プロジェクトで作成された、「受動喫煙による肺癌」を交絡因子(受動喫煙以外の原因)で説明するためのデータ。1991年12月23日



プロジェクトの黒幕 Proctor さんの経過報告書「Re: Japanese Spousal Study」より

All of the questionnaire data is now entered into a database and has been validated. Initial statistical evaluations look very promising, particularly with respect to confounding lifestyle and dietary factors.

今、全ての問診データをデータベースに入力し、確認しました。初回の統計評価は、特にライフスタイルと食事因子の交絡において、非常に期待が出来そうです。

Kruskal-Wallis test on the data split by smoker (S), non-smoker married to smoker (NS/S) and non-smoker married to non-smoker (NS/NS) showed statistically significant differences between NS/S and NS/NS for:

Exercise	NS/NS	>	NS/8
Fresh Fruit Consumption	NS/NS	>	NS/S
Dark Green Vegetables	NS/NS	>	NS/S
Orange Juice	ns/ns	>	NS/S
Milk	NS/NS	>	NS/S
Vitamin Supplements	ns/ns		
Alcohol	NS/8	×	NS/NS
Butter	NS/S	>	NS/NS
Smoked Fish	NS/S	۶	NS/NS
Coffee	NS/S	>	NS/NS

非喫煙者と結婚した非喫煙者を NS/NS、喫煙者と結婚した非喫煙者を NS/S として食品ごとに摂取頻度を調べました。非喫煙者と結婚した非喫煙者は、喫煙者と結婚した非喫煙者に比べて、運動量が多く、癌を予防するとされる食品の摂取量が多く、癌の危険を高めるとされる食品の摂取は少なく、これは統計学的にも有意でした。

Sincerely yours,

Christopher J. Proctor

プロジェクトを監督したBAT社の主任研究員 Chris Proctor のサイン

(Proctor C. Re: Study results and the Japanese spousal study [letter to tobacco industry executives]. Covington and Burling. 23 Dec 1991. Philip Morris documents website. Bates No 2023544474_4475.)

プロジェクトで作成された、「受動喫煙による肺癌」は交絡因子で説明できると結論する矢野榮二(帝京大学)と香川順(東京女子医科大学)の草案 1992年4月21日

DRAFT

Confounding factors in epidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese Women

E. Yano1 and J. Kagawa2

¹Teikyo University, Tokyo, Japan ²Tokyo Women's Medical College, Tokyo, Japan

要旨

The results reveals a very large percentage of misclassification of smoking status (around 20% of self-reported non-smokers being regular smokers). Moreover, it was found that living with a smoker correlated strongly with a variety of lifestyle factors thought to be independent risk factors for lung cancer or heart disease. These findings confirm that epidemiologic studies of spousal smoking that have not corrected for such confounding factors must be interpreted with caution.

…この結果、喫煙状態に関する非常に大きな誤分類(タバコを吸わないと回答した者の約20%が喫煙者であった)が明らかになった。さらに、喫煙者と共に住むことは肺癌や心疾患の独立した危険因子であると考えられている様々な生活習慣因子と強い関連があった。従って、これらの交絡因子を調整していない、妻の喫煙状況に基づ〈疫学研究は注意して解釈されなければならない。

The data also showed little correlation between ETS exposure, as determined by urinary cotinine, and typical questionnaire responses to questions on spouses smoking habits. In fact, cotinine levels in the non-smokers married to smokers were lower, though similar, to those in non-smokers married to non-smokers. To the extent that epidemiologic studies that have used spousal smoke exposure as a surrogate for ETS exposure have compared groups with similar ETS exposure, the studies are of little relevance to ETS but rather reflect differences in independent risk factors between smoking and non-smoking families.

尿中コチニン(訳注;ニコチンの代謝産物で受動喫煙の指標になる)測定による環境タバコ煙曝露と問診による配偶者の喫煙習慣との間にも関連は見られなかった。事実、喫煙者と結婚した非喫煙者のコチニン量は低く、むしろ、非喫煙者と結婚した非喫煙者と類似していた。よって、環境タバコ煙曝露の指標として配偶者の喫煙状況に基づく疫学調査によって、環境タバコ煙曝露による影響を評価することは不適切であるのみならず、喫煙する家族と喫煙しない家族との間に存在する独立した交絡因子による影響を反映することになる。

矢野榮二と香川順の草案は、受動喫煙の害を否定する内容でした。 1992年4月21日

DRAFT

Confounding factors in epidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese Women

E. Yano¹ and J. Kagawa²

¹Teikyo University, Tokyo, Japan ²Tokyo Women's Medical College, Tokyo, Japan

矢野榮二と香川順は、受動喫煙が肺癌の原因になると結論する論文が33件(統計学的に有意な報告もある)あり、政府機関も受動喫煙が肺癌の原因になると警告していることを知っていました。しかし、彼らの草案は受動喫煙と肺癌の関連を否定する内容でした。

Introduction より

majority of these (29 of 33) reported no statistically significant association, many have reported relative risks in excess of one (though generally below two). This has lead some organizations to claim a causal link between exposure to ETS and lung cancer. This has not been the case in Japan, where many scientists are still investigating the possible effects of ETS on various health endpoints.

受動喫煙が肺癌の原因になると結論する報告が33件あり、肺癌の相対危険は(全般的に2未満ですが)1を超えています。その内の29件では統計学的な有意性が報告されていませんでした。この結論に基づいて、いくつかの政府機関は受動喫煙が肺癌の原因になると主張しています。多くの科学者が環境タバコ煙による様々な健康影響について研究しているのは日本だけではありません。

More recently, diet has been as an important identified confounding factor in studies of ETS and lung cancer. Koo and others have reported that non-smokers living with smokers are more likely to consume more foods related to lung cancer risk, and consume fewer foods thought to be protective for lung cancer, than women married to non-smokers. This concordance of lifestyle factors also can falsely elevate the risk attributed to ETS.

最近、環境タバコ煙と肺癌の研究において、食事が重要な交絡因子として認識され始めた。Kooらは喫煙者と暮らす非喫煙者は、非喫煙者と暮らす者に比べ、肺癌になりやすい食事を摂る傾向があり、そして肺癌を予防する食品を食べない傾向にあることを報告している。この生活習慣因子の一致が、環境タバコ煙の疫学研究において肺癌リスクの偽の上昇をもたらした可能性がある。

Conclusions

The most significant finding is that spousal smoke exposure appears to be an entirely inadequate marker for exposure to ETS.

結論 …最も重要な発見は、妻のタバコ煙曝露は環境タバコ煙曝露の指標としては全く不適切であるということである。

to a smoker. However, the number of misclassified smokers in this study is relatively small (19 regular and 5 occasional) and the estimate of bias from this source is subject to large variation, so large that misclassification bias alone might explain the elevated risks for lung cancer found in some Japanese studies.

…この研究では(非喫煙者として)誤分類された喫煙者は比較的少数(毎日喫煙する者19人、時々吸う者5人)であった。しかし、多数の者が誤分類されることもある得るため、受動喫煙により肺癌の危険が増加するという日本の報告は、誤分類のみで説明できるだろう。

(矢野榮二、香川順. Confounding factors in epidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese women. Covington and Burling. 21 Apr 1992. RJ Reynolds documents website. Bates No 510627012 7023.)

プロジェクトで作成された論文 矢野榮二、香川順、そして Lee PN の名前で報告されている 1992年5月28日

MAY-28-1992 18:49 FROM C&B WASH DC 282+662+6291 TO

919197410719 P.03

Deapr

Confounding factors in spidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese Women.

E. Yano', J. Kagawa' and P.N. Lee'

Teikyo University, Tokyo, Japan Tokyo Women's Medical College, Tokyo, Japan P.N. Lee Statistics Ltd., London, U.K.

Abatrace

400 married Japanese women enswered questions on smoking, environmental tobacco smoke (ETS) exposure, diet and lifestyle, and supplied urine for cotinine smalysis. Major findings were: 要旨

結婚した日本人女性400人を対象に喫煙、環境タバコ煙曝露、食事と生活習慣に関する問診を行い、コチニン分析のための採尿を行いました。

These findings suggest Japanese epidemiological studies using smoking by the husband as an index of ETS exposure are invalid. The association, reported in some Japanese studies, between husband's smoking and lung cancer is probably due not to ETS, but to bias from smoking habit misclassification or from confounding by other risk factors.

これらの発見により、喫煙する夫と結婚したことを環境タバコ煙曝露の指標として利用 した日本の疫学研究(訳注;平山雄の研究)は不適切である。日本で報告された、夫の 喫煙と妻の肺癌との関係は、環境タバコ煙によるものでは無く、喫煙習慣の誤分類や他 の危険因子によるバイアスによるものである。

(Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. PN Lee Statistics and Computing.)

プロジェクトで作成された論文 矢野榮二、香川順、Lee PN の報告 1992年7月8日

Lack of validity of marriage to a smoker as a marker of environmental tobacco exposure among Japanese non-smoking women

E. YANO J. KAGAWA P.N.LEE

The findings in this study are consistent with the possibility that the association between lung cancer risk and smoking by the husband in Japan was not a result of ETS exposure, but was caused by bias from misclassification of smoking women as non-smokers or from confounding by lifestyle risk factors.

この研究の発見は、日本で報告された夫の喫煙と(タバコを吸わない妻の)肺癌の関係は、環境タバコ煙が原因ではなく、喫煙する女性が(非喫煙者として)誤分類されたことや、生活習慣などの交絡因子によるバイアスによるものであることを裏付ける。
(abstract より)

Conclusions

結論

Our findings cast considerable doubt on the value of epidemiological studies conducted in Japanese women using

husband's smoking as a marker of ETS exposure. The lack of association of cotinine levels with spouse smoking suggests the marker is an invalid one, and the huge proportion of smokers denying smoking gives an obvious potential for substantial bias.

我々の発見は、日本人女性の疫学研究で用いられた、夫の喫煙を環境タバコ煙曝露の指標として利用することに大きな疑問を投げかけるものである。夫の喫煙と妻の尿中コチニンとの間にも関連は認められなかったことからも、夫の喫煙は環境タバコ煙曝露の指標として不適切である。そして、喫煙を否定する喫煙者が非常に多いことも明らかに大きなバイアスを与える。

While there is a need to carry out more and larger studies among Asian populations to clarify further the importance of misclassification and confounding as sources of bias, the evidence reported here is sufficient to justify extreme caution in the interpretation of studies of spouse smoking and lung cancer in Japan.

バイアス源としての誤分類と交絡因子の重要性を更に明らかにするため、アジアでの更なる大規模な研究を行う必要があるが、我々の研究により、日本における夫の喫煙と(妻の)肺癌の研究を解釈する際には、十分な注意を払う必要があることが発見された。

(矢野榮二、香川順, Lee PN. Lack of validity of marriage to a smoker as a marker of environmental tobacco exposure among Japanese non-smoking women. Covington and Burling. 8 Jul 1992. RJ Reynolds documents website. Bates No 509810603_0630.)

1993年7月

プロジェクトの黒幕 Christopher Proctor さんからタバコ産業への手紙

Re: Japanese Spousal Study

Colleagues,

After considerable effort working with Dr. Yano at Teikyo University, we feel it is time to recommend that Mr. Peter Lee be asked to submit the Japanese spousal study research for publication in the British Medical Journal.

We spoke with Mr. Lee earlier today, and he has agreed with this course of action, but will await final approval. We suggest that some acknowledgement, as a footnote to the paper, be given to Dr. Yano's contribution to this research.

Please let me know if you wish Mr. Lee to proceed.

with kind regards.

30 - h I roles person

Sincerely yours,

Christopher J. Proctor

Re:日本人妻の研究

「帝京大学の矢野榮二さんとの協同作業は終了しました。そろそろ、Peter Lee さんに、日本人妻の研究を British Medical Journal に投稿するよう、お願いすべき時期ではないでしょうか。Peter Lee さんには、今日、我々の方から話をしています。 この件について、彼は同意して下さいました。最終的な承認をお待ちしています。なお、この研究にご協力いただいた矢野榮二さんへの謝辞を記すべきでしょう。Lee さんの投稿をお望みであれば私へご連絡ください。敬具 Chris Protctorより」

(Proctor C. [letter to tobacco industry executives to change authorship] Jul 1993. Bates No 2023544546.)

プロジェクトで作成された論文 タバコ産業の資金供与と矢野榮二の協力が acknowledgements に明記されている。

1993年8月15日

These findings suggest Japanese apidemiological studies using smoking by the husband as an index of ETS exposure are invalid. The association, reported in some Japanese studies, between husband's smoking and lung cancer is probably due not to ETS but to bias from smoking habit misclassification or from confounding by other risk factors.

これらの発見により、夫の喫煙を受動喫煙曝露の指標とした日本の疫学研究は不適切であることが示された。日本の研究で報告された喫煙と肺癌の関連は、恐らく環境タバコ煙によるものではなく喫煙習慣の誤分類や他の危険因子などの交絡因子によるものであろう。

Acknowledgements

I am extremely grateful to Dr. Biji Yano of Telkyo University for assistance provided in Japan, and to Bau Bfu Co Ltd. for help in sample collection and analysis. I thank Dr John Fry for assistance in statistical analysis, Dr. Francis Ros for numerous helpful comments, Mrs Pauline Wassell for typing, and several members of the tobacco industry for financial support. Views expressed are not necessarily of the tobacco industry.

acknowledgements には「ご協力いただきました帝京大学の矢野榮二さまに非常に感謝いたします・・・資金を供与していただきましたタバコ産業さまに厚く御礼申し上げます」とある。 (Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. PN Lee Statistics and Computing. 15 Aug 1993. Philip Morris documents website. Bates No 2023053346_3367.)

1993年10月5日 タバコ産業はLee さんとの関係を隠そうとします。

06 OCT *93 11:27 DTL SALES & MRIG DIV



Imperial Tobacco Limited

Sales & Marketing Division
PO Box 525, Southville, Bristol 3699 (LQ
Telephone: 5272 65668 Facsimile: 5272 667408

FACSIMILE

5th October 1993

To:

Mr R Pauling - VdC

From:

Dr P A Sadler

cc:

Dr W D Rowland - Rothmans

Dr S Boyse - BAT

Mr M Winokur - Philip Morris Dr C Walther - Reemtsma : Mr R Marcotullio - RJR

International Scientific Media Workshop

Thank you for your faxes concerning the workshop. I agree with your concern about Lee participating - it would clearly move the discussion from the general to the specific.

ワークショップに関するファックスありがとうございます。Lee さんの参加に対する不安については同意見です。Lee を呼べば議論の対象が一般的な事柄から、明らかに特定の話題へと集中するでしょう。

I actually have the same concern about the use of the unpublished Japanese study, and even of the unpublished Hazelton study. Since Phillips has no other involvement at all (as far as I know) with Indoor Air Quality, his invitation to the panel may well make it seem as through the industry is involved, which would dilute the objective.

私も未発表の日本研究や未発表のHazelton研究の利用について、同様な心配をしています。フィリップモリス社は(私の知る限り)まさにIndoor Air Quality に関与しています。Lee さんをこのワークショップに招待すれば、タバコ産業が関与していることが明らかになってしまうでしょう。それでは計画が水の泡です。

(Sadler PA. Re: Publicizing Japanese spousal study at the International Scientific Media Workshop [letter]. Imperial Tobacco. 5 Oct 1993. Philip Morris documents website. Bates No 2025495799.)

プロジェクトで作成された論文 タバコ産業の資金供与と矢野榮二の協力が acknowledgements に明記されている。

1994年5月18日

Misclassification was found to be much commoner among Japanese than Western women. This has often been predicted, based on the fact that smoking by women is not considered socially acceptable in Japan, 日本では西洋に比べ誤分類が多いことが示された。これは、日本では女性の喫煙が社会的に容認されていないためであると考えられる。

cotinine was not increased if the husband smoked. These findings suggest Japanese epidemiological studies of non-smoking women using husband's smoking as an index of ETS exposure are invalid. The increased lung cancer risk reported in some of these studies is probably not due to ETS but to bias from smoking habit misclassification or from confounding by other risk factors.

これらの発見により、タバコを吸う男性と結婚した非喫煙女性を受動喫煙曝露の指標として利用した疫学研究は不適切であることが示された。これらの研究で観察された肺癌リスクの上昇は、受動喫煙によるものではなく、喫煙習慣の誤分類や他の危険因子などのバイアスによるものである。

ACKNOWLEDGEMENTS

I gratefully acknowledge financial support from several companies of the tobacco industry.

I am extremely grateful to Dr Eiji Yano of Teikyo University for assistance provided in Japan, and to Emu Efu Co Ltd for help in sample collection and analysis. I also thank Dr John Fry for assistance in statistical analysis, Dr Francis Roe for numerous helpful comments, and Mrs Pauline Wassell for typing.

acknowledgements

「資金を供与してくださいました複数のタバコ産業様に厚く御礼申し上げます。 日本からご協力下さいました帝京大学の矢野榮二さまに非常に感謝いたします...」 (Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. Philip Morris. 18 May 1994. Philip Morris documents website. Bates No 2050751646_1666.)

蓄積されてきた環境タバコ煙の発癌性の証拠

矢野榮二らは誤分類という理論で受動喫煙の害を否定しようと試みました。 しかし、誤分類バイアスで受動喫煙の害を否定しようという試みは無理があります。

受動喫煙研究では「喫煙する男と結婚した非喫煙女性」と「喫煙しない男と結婚した非喫煙女性」という2つのグループにおける肺癌の発生率を比較しています。仮に、女性は喫煙を隠す傾向があるとしても、誤分類は両群で発生するわけですから誤分類による影響は相殺されてしまいます。また、「喫煙する男と結婚した非喫煙女性」の誤分類率が極端に高ければ矢野栄二の主張はもっともらしく見える可能性がありますが、これはタバコ煙の発癌性を強く認める主張であり、タバコ煙の有害性を否定する根拠としては使えない理論でした。

プロジェクトで作成された論文 1995年

矢野榮二らは、「環境タバコ煙が肺癌の危険を高めるという直接的な証拠はない」と結論する論文を作成しました。

Japanese epidemiological studies using "marriage to a smoker" to index ETS exposure may therefore have compared groups with similar ETS exposure, suggesting that associations reported between lung cancer and this index in some of these studies may result from bias. While other biases, including confounding, may also be important, bias resulting from smoking misclassification combined with husband/wife smoking concordance is shown to be of major concern. The high misclassification rates in Japan, much higher than in Western populations, undermine conclusions from epidemiological studies conducted there.

喫煙者と結婚することを環境タバコ煙曝露の指標として利用した日本の疫学研究により、肺癌とこの指標との間に認められた関連はバイアスによるものであろう。交絡因子を含む他のバイアスもまた重要であり、夫婦の喫煙状態の誤分類が最も大きな影響を及ぼすバイアスであることが示された。日本の誤分類率は西洋と比較して高く、日本で行われた疫学研究は信用に値しない。

この論文は Lee PN の名前で発表されましたが、acknowledgements に矢野榮二の協力があったこと及びタバコ産業からの金銭供与があったことが記されています。

Lee, PN. "Marriage to a smoker" may not be a valid marker of exposure in studies relating environmental tobacco smoke to risk of lung cancer in Japanese non-smoking women.

International Archives of Occupational and Environmental Health 1995, 67(5):287-94.

Acknowledgements I gratefully acknowledge financial support from several companies of the tobacco industry.

I am extremely grateful to Dr. Eiji Yano of Teikyo University for assistance provided in Japan, and to Emu Efu Co. Ltd. for help in sample collection and analysis. I also thank Dr. John Fry for assistance in statistical analysis, Dr. Francis Roe for numerous helpful comments, and Mrs. Pauline Wassell and Mrs. Diane Morris for typing the various drafts.

acknowledgements

「資金を供与してくださいました複数のタバコ産業様に厚く御礼申し上げます。 日本からご協力下さいました帝京大学の矢野榮二教授に非常に感謝いたします...」

プロジェクトで作成された論文 完成した論文 1995年 つづき

「職場における環境タバコ煙が肺癌の危険を高めるという直接的な証拠はない」

"There is no direct evidence that workplace environmental tobacco smoke (ETS) increases lung cancer risk."と書かれている



(Lee PN. "Marriage to a smoker" may not be a valid marker of exposure in studies relating environmental tobacco smoke to risk of lung cancer in Japanese non-smoking women. Int Arch Occup Environ Health 1995; 67: 287-294)

蓄積されていた環境タバコ煙の発癌性の証拠

1995 年、矢野榮二らは環境タバコ煙と肺癌の関連を否定する報告をします。しかし、当時、世界では環境タバコ煙と肺癌の関連を肯定する結果が多数報告され、統計学的に有意な結果も複数発表されていました。

Hirayama's work has stood the test of time

Table 1. Risk of lung cancer in passive smokers: results of study by Hirayama (1) confirmed by major international consensus reports

Report	Year	Country	Relative risk	Confidence interval ^a
Hirayama (1, 9, 10)	1981	Japan		
1-19 cigarettes a day		·	1.61	1.09-2.39
20 cigarettes a day or more			2.08	1.39-3.11
US Environmental Protection Agency (20)	1992	USA	1.19	1.01–1.39
National Research Council (13)	1986	USA	1.34	1.18-1.53
Surgeon General (12)	1986	USA	1.53	na
California Environmental Protection Agency (21)	1997	USA	1.20	na
National Health and Medical Research Council (<i>22</i>)	1997	Australia	1.32	1.10–1.69
Scientific Committee on Tobacco and Health (23)	1998	UK	1.20-1.30	na

^a Confidence intervals are two-tailed 95%, except US EPA which is one-tailed 95% (two-tailed 90%).

na = not available.

As time passed, several independent scientific bodies around the world reviewed the evidence that passive smoking causes lung cancer (and a wide variety of other diseases) and reached similar conclusions (Table 1). These reports helped stimulate the passage of clean indoor air ordinances, which not only protect non-smokers from second-hand smoke but also create an environment that makes it easier for smokers to stop (14, 15).

Bulletin of the World Health Organization, 2000, 78 (7)

時が経ち、タバコ会社からの資金供与を受けていない、独立した科学団体が受動喫煙と肺癌(その他、様々な疾患)との因果関係の証拠に関する研究を行い、平山雄と同様な結論を導き出しました。これらの報告書は屋内空気規制条例の成立を促し、非喫煙者を受動喫煙の害から保護するのみならず、喫煙者にも禁煙しやすい環境を提供しました。

(Hirayama's work has stood the test of time, Bulletin of the World Health Organization, 2000)

JR西日本職場分煙要求訴訟で提出された論文

さて、このたび発表されたタバコ産業の内部文書により、受動喫煙の害を隠すプロジェクトの一部が明らかになりました。しかし、今回発覚した事件は受動喫煙の害を隠すプロジェクト全体のほんの一部であり、その全容が明らかになったとは思われません。

このプロジェクトではタバコ産業の関与を隠すため、矢野榮二と香川順への金銭授受はタバコ産業が設置した Center for Indoor Air Research(CIAR;屋内空気研究センター)を通じて行われていました。

矢野榮二と香川順が提案したプロジェクトで作成された論文が、Lee PN の名前で発表されていたことが明らかにされました。果たして、Lee PN の論文はどのように利用されているのでしょうか? JRの従業員が職場の分煙を求めて提訴した、JR 分煙訴訟で分煙を拒否しているJR側が提出した書証と受動喫煙の害を隠すプロジェクトで作成された論文を発表年順にご紹介します。

1992年

プロジェクトにより"受動喫煙の疫学研究と交絡因子"に関する論文が作成されます。

「…この研究では(非喫煙者として)誤分類された喫煙者は比較的少数(毎日喫煙する者19人、時々吸う者5人)であった。しかし、多数の者が誤分類されることもある得るため、受動喫煙により肺癌の危険が増加するという日本の報告は、誤分類のみで説明できるだろう。」

(矢野榮二、香川順 Confounding factors in epidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese women. Covington and Burling. 21 Apr 1992. RJ Reynolds documents website. Bates No 510627012_7023.)

1992年

春日斉は"受動喫煙の疫学研究と交絡因子"に関する論文を発表します。

「ETSの研究では、ETS測定法の未開発、ETS被爆者と疾患の誤分類による bias や、それに基づくETSの過大評価、微弱なETSと肺癌の関連の分析方法、信頼が高いといわれてきた Cohort study の欠点、様々な交絡変数等の問題がクローズアップされている。」

(春日斉 環境中たばこ煙による受動喫煙の疫学 大気汚染学会誌 J.japan Soc.Air Pollut.27(4)175~189、1992 JR西日本分煙訴訟乙第8号証)

1993年

プロジェクトにより"受動喫煙研究の限界"に関する論文が作成されます。

「夫の喫煙を受動喫煙曝露の指標とした日本の疫学研究は不適切であることが示された。日本の研究で報告された喫煙と肺癌の関連は、恐らく環境タバコ煙によるものではなく喫煙習慣の誤分

類や他の危険因子などの交絡因子によるものであろう。」

(Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. PN Lee Statistics and Computing. 15 Aug 1993. Philip Morris documents website. Bates No 2023053346 3367.) acknowledgements に矢野榮二の協力が明記されている。

1993年

春日斉は"受動喫煙研究の限界"に関する論文を発表します。

「(喫煙についての)ランダムに発生する"勘違い"報告は不可避であるが2%を超えることは稀であるのに対し、故意の誤報告は20-30%に達するとのLeeや Jarvisの報告があり、biasの発生源として見逃すことはできない」

「Lee らは、ETSと直接関連しないこれらライフスタイルの諸因子が肺癌と交絡するところから、誤 分類バイアスと併せ、ETS曝露による肺がんリスクの増加を説明できると述べている」

(春日 斉 禁煙論批判 - 主として受動喫煙の立場から - 病態生理 Vol1.12 No.3 (1993:3) JR西日本分煙訴訟乙第10号証)

1994年

プロジェクトは"日本の環境タバコ煙研究の限界"に関する論文を作成します。

「日本では女性の喫煙が未だ社会的容認を得に〈いため、喫煙者が非喫煙との虚偽の報告をする割合が西洋に比べると高い」

「これらの研究で観察された肺癌リスクの上昇は、受動喫煙によるものではなく、喫煙習慣の誤分類や他の危険因子などのバイアスによるものである。」

(Lee PN. Limitations of studies of lung cancer and environmental tobacco smoke exposure in Japanese non-smoking women. Philip Morris. 18 May 1994. Philip Morris documents website. Bates No 2050751646_1666.) acknowledgements に矢野榮二の協力が明記されている。

1994年

春日斉は"日本の環境タバコ煙研究の限界"に関する論文を発表します。

「日本では女性の喫煙が未だ社会的容認を得にくいため、喫煙者が非喫煙との虚偽の報告をする割合が20-30%に達することも稀でないことは、我々やLeeらの尿中ニコチン調査でも明らかであり、その誤分類によるバイアスは見逃すことが出来ない」

(春日斉 環境中たばこ煙(ETS)への曝露をめぐって-疫学の視点から- 癌治療・今日と明日 Vol.16,No.3 JR西日本分煙訴訟乙第11号証)

1995年

プロジェクトにより「環境タバコ煙が肺癌の危険を増加させると言う証拠は無い」と結論した論文が発表されます。

(Lee PN. "Marriage to a smoker" may not be a valid marker of exposure in studies relating environmental tobacco smoke to risk of lung cancer in Japanese non-smoking women. Int Arch Occup Environ Health 1995; 67: 287-294) acknowledgements に矢野榮二の協力が明記されている。

1995年

春日斉が「環境タバコ煙が肺癌の危険を増加させると言う証拠は無い」と主張する論文を発表します。

「Lee によれば、…研究の質が劣るほどリスクが大きく、Odds 比下限値は 1.16 と有意であり、質が優れている論文ほど、Odds 比 1.06、下限値 0.95 と有意でなくなっている。このことは明らかに疫学の研究レベルが上がるにつれ Odds 比は 1.0 に収斂し有意でなくなる傾向にあると言える」 (春日 斉 たばこの害と効用についての認識 Health Sciences Vol.11 No1.1995 JR西日本分煙訴訟乙第12号証)

JR西日本職場分煙要求訴訟で提出された論文 その2

JR西日本分煙要求訴訟(職員が職場の分煙をお願いしたところ会社側が分煙を拒否したため起きた訴訟)では、受動喫煙の害を否定する根拠として、受動喫煙の害を肯定するWHO/IARCの報告書が、JR側から提出されています。

JR西日本が提出した書証に書かれていること。

準備書面(2)p12、平成14年12月16日

「・・・世界保健機関(WHO)の付属機関である国際がん研究機関が実施し、平成10年に発表された最新の大規模疫学研究によっても、ETS曝露と肺癌との間には統計的な有意な関係が無いとの研究結果が得られている・・・」

「・・・受動喫煙が原因で肺癌が発生するということは全く証明されていない。」

WHO/IARCの報告書に書いてあること

IARC BUENNIAL REPORT 1996-1997,P76-77,1997 (JR提出 乙第22号証の1)

"The relative risk (RR) of lung cancer risk was 1.16(95%CI 0.93-1.44) for exposure to ETS from the spouse,1.17(0.94-1.45) for workplace ETS exposure"

タバコを吸う男性と結婚した非喫煙女性は、タバコを吸わない男性と結婚した者に比べ、肺癌の 危険が約16%増加する。職場の受動喫煙は肺癌の危険を約17%増加させる。

矢野榮二と香川順の草稿に書かれている内容とJR職場分煙要求訴訟でJRが提出した書証の内容は非常に良〈似ています。

「受動喫煙が肺癌の原因になると結論する報告が33件あり、肺癌の相対危険は(全般的に2未満ですが)1を超えています。その内の29件では統計学的な有意性が報告されていませんでした。」

(矢野榮二, 香川順. Confounding factors in epidemiologic studies of spousal smoke exposure in Japanese women. Covington and Burling. 21 Apr 1992. RJ Reynolds documents website. Bates No 510627012_7023.)

1998年3月のWHOプレスリリース 受動喫煙は肺癌の原因です。彼らの嘘を許すな!

http://www.who.int/inf-pr-1998/en/pr98-29.html

Press Release WHO/29 9 March 1998

PASSIVE SMOKING DOES CAUSE LUNG CANCER, DO NOT LET THEM FOOL YOU

WHO は情報を隠しているとして公然と糾弾されています。彼らは、WHOが受動喫煙(あるいは、環境タバコ煙)と肺癌、そして数多くの疾患との関連を科学的に証明することに失敗し、それを隠していると主張しています。彼らの主張は事実ではありません。問題の研究は、環境タバコ煙が肺癌のリスクに及ぼす影響を調べるため、ヨーロッパで行われたケース・コントロールスタディです。この研究はWHOの癌研究部門 International Agency for Research on Cancer (IARC)の下、ヨーロッパ7カ国にある12の研究機関が7年間に渡り調査したものです。

この研究結果が、全〈誤って報道されています。この研究は、ヨーロッパや他の地域で実施された類似する研究と同様、受動喫煙は非喫煙者の肺癌の原因になると結論しました。この研究では、タバコを吸う男性と結婚した非喫煙女性は、タバコを吸わない男性と結婚した者に比べ、肺癌の危険が約16%増加すると結論されました。職場の受動喫煙は肺癌の危険を約17%増加させます。しかしながら、サンプルサイズが小さかったため、統計学的に有意であるとは言えませんでした。しかしながら、この研究は受動喫煙を防止することにより、肺癌の危険が減少することを示しました。

1998年2月、通常の手順に従い、この研究結果をまとめた論文は、査読とピアレビューのため由緒ある科学雑誌宛に送付されました。このため、この研究の全内容はまだ公表されていません。しかしながら、このような状況になったため、著者は論文の要旨をメディアに公開することに合意しました。「この研究により、1997年にオーストラリア政府、米国環境保護局(EPA)、そしてカリフォルニア州によって発表された大規模な研究結果と一致する結果が得られたことは非常に重要です」と、Acting Chief of WHO's Tobacco or Health Unit in Geneva の Neil Collishaw さんは語りました。「受動喫煙と肺癌に関する大規模メタアナリシスが1997年の British Medical Journal に発表されました。これらと蓄積された科学的根拠により、はっきりと世界的に科学的コンセンサスが得られています。すなわち、受動喫煙は肺癌とその他の疾患の原因です」彼は結論しました。「IARCはヨーロッパの科学者チームによってなされた受動喫煙研究のための慎重な科学的作業に誇りをもっています」Agency's director の Dr Paul Kleihues さんは語りました。

我々は、最近マスメディアが行った、事実でない、誤解を招く報道を非常に心配しています。 「英国で誤った情報が報道されたのは、世界無タバコデーと英国科学委員会による「タバコと健康」発表の直前であり、これは偶然ではありません」

2002年6月のプレスリリース IARC は受動喫煙が人間への発癌性を有すると 宣言しました。

http://www.iarc.fr/pageroot/PRELEASES/pr141a.html

IARC MONOGRAPHS PROGRAMME DECLARES
SECOND-HAND SMOKE CARCINOGENIC TO HUMANS

フランスのリヨンにある WHO の組織である IARC(国際癌研究機関)の Monographs Programme により 12 カ国から 29 人の専門家ワーキンググループが召集されました。そして能動喫煙および受動喫煙と癌に関する証拠となる全ての重要な研究を評価しました。

能動喫煙による発癌効果は 1986 年、初期のワーキンググループによって、明白に発癌性があると結論付けられました。そして、今、受動喫煙の発癌性の評価により、受動喫煙は人間に対する発癌性を有すると結論されました。

能動喫煙(自らタバコを吸うこと)

健康に与える影響は甚大

要約するとタバコの流行は大規模な被害をもたらしています。喫煙者の半数はタバコ関連疾患により死亡します。タバコによる死亡の半数が中年期(35-69歳)に発生します。タバコによって殺される喫煙者は平均寿命より 20-25 年寿命が短くなります。タバコは発展途上国および女性の間で大流行しています。世界ではタバコによる癌で年間数百万人が死亡しています。タバコは心疾患、呼吸器疾患、脳卒中の原因となり若死させ、それらの疾患による死亡数の合計は癌で死亡する者の数より多くなります。それにもかかわらず、タバコは癌の予防しうる原因として世界最大です。

不幸にも、我々が喫煙と癌の因果関係を調査すればするほど、我々が以前に想像していた 以上に、喫煙と癌の因果関係は強く、さらに、喫煙は様々な臓器の癌の原因であることが 明らかになりました。

喫煙は様々な内臓の癌の原因

ワーキングループはモノグラフの中で、タバコが原因である癌のリストに胃癌、肝臓癌、 子宮頸癌、腎癌(腎細胞癌)、骨髄性白血病を追加しました。これらは世界中で良く知られ ている癌です。さらに、タバコの発癌性は既知の発癌性物質の曝露により著しく増強され 様々な臓器の癌を引き起こすことが明らかになりました。

タバコの種類

タバコには紙巻タバコ以外にも様々な種類があります。例えば、パイプ、bidis(南アジアで広まっており、米国でも流行しつつある。)なども肺癌、頭部の癌、頚部の癌、その他、様々な癌の原因です。

若い時期からの喫煙はタバコの危険性をより一層増加させます。喫煙期間が長ければ長い ほど喫煙者の危険は増大します。世界中の若者が若い時期から喫煙を始める傾向があり、 彼らは人生の後半で大きな危険に直面することになります。

タバコを吸うな! もし、あなたが喫煙者なら、禁煙しなさい。

決してタバコを吸い始めないことが最良の選択肢です。今後数十年間の世界での癌死亡数は、禁煙により発癌の危険を低下させることによって、減少させることが出来ます。 どの銘柄のタバコを吸っても有害性はほとんど変わりません。幸運にも、禁煙は全ての年齢の喫煙者に利益をもたらすという科学的証拠があります。もし、30 台の初めまでに禁煙することが出来ればタバコによる大部分の有害な影響を避けることが可能です。しかし、たとえ人生後半で禁煙に成功したとしても危険は減少します。仕事中は禁煙しましょう。

男性と女性

男性でも女性でもタバコを吸い続ければ肺癌の危険が高まります。米国と英国(かつては多くの女性が喫煙していた。)の研究では男性・女性ともに肺癌の原因の約90%はタバコが原因です。

いくつかの癌では影響が見られませんでした

タバコは全ての癌の原因ではありません。乳癌、子宮内膜癌、前立腺癌はタバコが原因で あるとは認められませんでした。

非喫煙者

受動喫煙は肺癌の原因です。

非喫煙者は喫煙者と同等に発癌性物質に曝露されます。典型的なレベルでの受動喫煙でさえも非喫煙者の肺癌の原因になることが明らかになりました。受動喫煙は人間に対する発

癌性があります。乳癌やその他、能動喫煙により発生しない種類の癌が受動喫煙で引き起こされるかもしれないとの懸念は不要です。

子供たちへの影響については確実なことは言えません。幼児期に曝露された受動喫煙が子供達の将来の癌の危険を増やすかという点については、現時点では不明です。

IARC Monographs とは

The IARC Monographs series は独自に国際的な専門家により、様々な物質、混合物、曝露による人体への発癌性を評価した権威のある報告書です。1972 年の調査開始以来、880以上の物質を評価してきました。そして、IARC Monographs はさまざまな物質を広く評価していることや正確性、信頼性により有名になりました。

2002年12月13日 受動喫煙の害を隠すプロジェクト

Health Scout News による報道

http://www.healthcentral.com/news/NewsFullText.cfm?id=510802

Big Tobacco Accused of Manipulating Study

受動喫煙の害を隠したタバコ産業が非難されました

カリフォルニアの研究者は、受動喫煙の危険を否定する研究報告はタバコ産業による大きな影響を受けていたと語りました。しかし、タバコ産業は、「タバコ産業の関与を明記した」と語りました。

By Randy Dotinga

Health Scout News Reporter

FRIDAY, Dec. 13 (Health Scout News)

受動喫煙と肺癌の関連を発見した画期的な日本(注;平山雄)の研究報告から15年後、その研究は誤りであると結論する研究報告が発表されました。

カリフォルニアの教授は、この論文の作成の裏舞台で、タバコ産業が影響を及ぼしていたことが 隠されていたと語ります。この研究報告は受動喫煙の害に関する直接的な調査は行わず、著者 (注:平山雄)の信用性に疑問を投げかける内容でした。

University of California at San Francisco の clinical pharmacology 教授 Lisa A. Bero さんは語りました。「このプロジェクトの責任者は判りません。関与を隠したようです」しかしながら、受動喫煙と肺癌の関連を否定したその研究について、タバコ産業のスポークスマンは、はっきりと、タバコ産業が資金を供与して支援していたことを認めました。

1981年に発表された平山雄の研究は非常に大きな反響を呼びました。平山雄はタバコを吸う男性と結婚した女性は、非喫煙者と結婚した者と比べ、肺癌で死ぬ危険が約2倍に増えることを発見しました。

この研究が引き金となって受動喫煙の害に関する論争が始まり、20年以上も論争が続いています。その他、この発見は、全米で、喫煙する権利を制限することに貢献しました。

Bero さんは、1981年の平山雄の研究を否定した報告に、タバコ産業がどのように関与していたのかを調べました。彼女は1990年代末に公表されたタバコ産業の内部文書から平山雄に関連する文書を探しました。

彼女の発見は British Medical Journal に掲載されました。Bero さんは、平山雄の報告を否定する研究を企画立案する、タバコ産業の正式な内部文書を発見しました。さらに、タバコ産業が設置し

た Center for Indoor Air Research (CIAR)と呼ばれる研究財団を通じて資金が供与されたことも明らかになりました。タバコ産業の内部文書には「CIAR を利用して、(注;タバコ産業の)プロジェクトへの関与を隠したい」と書かれていました。さらに、別の内部文書では、タバコ産業の主任研究員がこのプロジェクトの黒幕だったことを示していました。

プロジェクトで作成された研究は International Archives of Occupational and Environmental Health in 1995 に発表されました。この研究は、受動喫煙と肺癌の関連を否定する内容でした。 作成された論文はタバコ産業のコンサルタント(注; Lee PNさん)の名前で発表され、タバコ産業から資金を授受したことが明記されました。

しかしながら、Bero さんは、タバコ産業の科学者、タバコ産業の法務部、そして2人の日本人研究者の関与が隠されていたと語ります。「本当に、タバコ産業が関与した研究には疑問を抱くべきです。もちろん、タバコ産業の関与が明記されている場合でも同様です」

Bero さんは語りました。「タバコ産業の計画と指揮の全容は明らかになっていません」

一方、1995年の研究に資金を供与したタバコ産業のスポークスマン Seth Moskowitz さんは、「非常にはっきりと、タバコ産業の関与を記しました」「平山雄の研究は非常に激しく中傷されたというのがタバコ産業の見解です」と、語りました。

タバコ産業のスポークスマン Brendan McCormick さんは、「タバコ産業が喫煙研究に、直接的あるいは間接的であれ、関与していれば、必ず公表すべきであるというのがタバコ産業のポリシーです」と、語りました。

受動喫煙の危険についてタバコ産業は、「人々は、公衆衛生関係者が語る言葉を信じるべきだと思います」と、付け加えました。

2002年12月17日のWHOプレスリリース 受動喫煙の害を隠すプロジェクト

http://www.paho.org/English/DPI/pr021217.htm

PAHO Press Release

New PAHO Report Describes Tobacco Industry Tactics to Derail Public Health Efforts in Latin America and the Caribbean

タバコ産業が公衆衛生行政を妨害していると WHO/PAHO の報告書は述べました。 Washington, December 17, 2002 (PAHO)

国境を越えて活動するタバコ産業が、喫煙と受動喫煙との害を認識しながら、ラテンアメリカとカリブ海諸国の人々を欺くため、10 年間に渡り、虚偽の医学情報を提供するキャンペーンを指揮していたこと、および、タバコ産業によるタバコ販売戦略の真の姿について、Pan American Health Organization (PAHO)は新しい報告書「生命を奪い、利益を上げる (Profits Over People)」を発表しました。

このキャンペーンは分煙とタバコ販売規制を阻止、あるいは遅延させるために計画されました。この報告書は1万ページ以上にも及ぶタバコ産業の内部文書の調査に基づいています。タバコ産業の内部文書はインターネットと英国の Guildford depository から入手しました。

タバコ産業について明らかにされたこと

- ・タバコ産業は医師を雇い、受動喫煙の害を隠すため、虚偽の医学情報を広めました。そ して、タバコ産業は、虚偽を広めている医師がタバコ産業に雇われていることを隠しまし た。
- ・タバコ産業は、"未成年喫煙防止キャンペーン"を利用し、有効なタバコ販売規制を妨害する、重要なタバコ宣伝活動として企画しています。
- ・タバコ産業は密輸組織、密輸市場、密輸活動に関する詳細な知識を持っており、タバコ 宣伝を立ち上げ、非合法市場に販売ルートを構築し、非合法取引においてもシェアを増加 させようとしています。
- ・タバコ産業は数多くの国々において、要職にある政府官僚に近づき、タバコ規制を弱め、 あるいは否決させることに成功しました。

タバコ産業の内部文書により、タバコ産業が恐れていることが明らかになりました。タバコ産業は2枚舌です。例えば、タバコ産業は、タバコ広告と喫煙開始の関係について公然

と否定していますが、タバコ産業の内部文書によると、タバコ産業は広告規制がタバコ販売を脅かすことを知っており、タバコ産業は広告規制を最優先課題として阻止しています。

「タバコ規制に厳しい地域」での主要な戦略は、タバコ産業による「未成年喫煙防止キャンペーン」です。タバコ産業による「未成年喫煙防止キャンペーン」では健康問題に焦点を当てず、「タバコは大人になってから」というメッセージしか伝えません。

タバコ産業による「未成年喫煙防止キャンペーン」の主な目的は、タバコ産業が市民の懸 念を考慮しているという印象を与え、喫煙は「大人」の習慣であると印象つけることです。

このキャンペーンについて述べたタバコ産業の内部文書には「未成年のタバコ使用を減少させる」という目的はありませんでした。PAHO Director の Dr. George Alleyne さんは語ります。

「PAHO はタバコ対策として、タバコ宣伝の禁止、タバコ税増税、そして、分煙が最も重要であると認識しています」

Dr. Alleyne さんはさらに政府に対し、タバコ産業が提案するタバコ対策は信用せず、タバコ産業との協調関係を避けるよう要求します。

「PAHO と政府は、公衆衛生行政の判断を下す際には、信用ある、独立した専門家の意見を聞く責任があります。タバコ産業にとって公衆衛生行政はタバコ産業の収益を左右するものであり、タバコ産業は信用ある専門家ではありません」と、彼は語りました。

タバコ産業は毎年、世界中で約500万人もの人間を殺しており、アメリカだけでも年間100万人が殺されています。昨年のPAHO会議で、アメリカ諸国の厚生大臣は「喫煙および受動喫煙曝露が、国民の健康と保険制度の莫大な負担になっている」ことを認めました。そして、厚生大臣は「タバコ規制枠組み条約の一部となる国家計画を制定し、特に子供と若者における喫煙開始を阻止し、禁煙を促進する」ため、各国にタバコ規制枠組み条約への参加を呼びかけました。

厚生大臣はまた、タバコ撲滅を促すタバコ税増税と、非喫煙者を受動喫煙から守るため、政府施設、医療機関、学校、そして職場の禁煙を要求しました。PAHO は 1902 年に設置された WHO のアメリカ地域事務所です。PAHO はアメリカ諸国の人々の健康と生活水準の向上に貢献し、今年で 100 周年になりました。

For more information, visit

http://www.paho.org/English/HPP/HPM/TOH/profits over people.htm.

あとがき

1995 年、わが国に深い悲しみがもたらされました。この年、平山雄が病死したのです。タバコ産業から金銭を供与された御用学者は、平山雄が病死する直前まで、彼の受動喫煙研究を中傷し続けていたのです。そして、平山雄が死亡してもなお中傷が止むことはありませんでした。事実、平山雄が死んだ現在、今でもなお平山雄への中傷が続いています。例えばJR分煙訴訟です。職場の分煙を拒否して職員から提訴されたJRは受動喫煙の害を否定する根拠としてこのプロジェクトによって作成された論文を書証として提出しています。

平山雄は全人類に奉仕するという大役を引き受けましたがタバコ産業から資金を供与された御用学者らによって執拗に、死ぬ直前まで中傷され続けていたのです。大気汚染問題やダイオキシン問題などに〈らべて、受動喫煙の害は簡単に隠されてしまいました。

人生に高貴な目的を持ち、勇気と理想を持った平山雄を失ったことは残念でなりません。平山雄は突然の衝撃と深い悲しみを受けた受動喫煙による犠牲者とその家族のことを思っていました。受動喫煙の害により、いかに多くの人々の生命が失われたでしょうか。平山雄は常に世界中の尊敬と感謝を受けるでしょう。平山雄が命を捧げた大儀は今後も生き続けます。私達は平山雄が受けた批判と中傷と悲劇を見ました。

残念ながら平山雄による「受動喫煙は肺癌の原因である」という研究結果は、現在もなお御用学者らによって中傷され続けています。しかし、我々には出来ることがあります。この悲劇を繰り返さないよう、後世にこの事実を伝えていきましょう。我々のヒーローである平山雄、そして悲しみにくれる受動喫煙の被害者とその家族に神のご加護がありますように。